

資料

(平成二十四年十二月)

第五十七回「合宿教室」(阿蘇) 感想文集

日本人としての自覚をもとめて

社団法人 国民文化研究会

第五十七回 “合宿教室（阿蘇）” 全参加者の感想文と短歌詠草



とき 平成二十四年八月十六日（木）から十九日（日）まで三泊四日間
 ところ 熊本県阿蘇市「国立阿蘇青少年交流の家」
 参加総数 一五二名

目次

“はしがき” に代へて	理事長 上村和男	2
大学別参加者数・その他の人数の内訳		4
“合宿教室” 57年の歩み		5
“合宿教室” の日程表（三泊四日）		7
第57回 “合宿教室” のあらまし		8
走り書きの “感想文” と第二回目の “短歌詠草”	参加者全員	25
合宿中に創作された「短歌詠草」	参加者全員	77
あとがき		93
カメラ・レポート22枚（27ページから69ページの左頁に掲載）		

“はしがき”に代へて

(社)国民文化研究会理事長(東海ゴム工業顧問)

上村和男

昭和三十一年(一九五六年)の本会創立以来、第五十七回目を迎へての「全国学生青年合宿教室」は、八月十六日から十九日までの三泊四日間、九州・阿蘇国立公園に於て開催し、宿舎の「国立阿蘇青少年交流の家」は「平成」になつてから八回目的の利用になりました。

毎日の「朝の集ひ」では国旗掲揚・国歌斉唱・ラジオ体操が行はれ、また、第三日目の夜には合宿教室参加者と共に、戦時・平時を問はず祖国日本のために命を捧げられたすべての祖先のみ霊に感謝申し上げる「慰霊祭」を阿蘇高原の星空のもとで厳粛に行ふことが出来ました。一方、楽しみにしてゐた阿蘇中岳へのハイキングでは、火口からの噴煙が激しくなり、急遽避難せざるをえなくなつたり、山岳特有の一时的な雷雨に遭遇しバスに避難するなどがありましたが、楽しい一日を経験しました。参加者の和歌にも歌はれてますが、七月の豪雨により緑の山肌が削り取られ地肌が露出してゐる姿が痛ましく思はれました。講師としてお招きしました作家で慶応義塾大学の講師であられる竹田恒泰先生は、明治天皇の玄孫に当たられる方で「日本はなぜ世界で一番人気があるのか―日本の歴史と皇室のありがたさ」と題してご講義いただきました。その中で先生は「世界の国々の中で、今まで一国の歴史が五百年も続けば永い方です。日本が二千年も続いてゐるのは稀有なことで、皇室と国民が一体となつた“和の国”であるから」と指摘されて、次に“和”と“同”の違いを述べられ「“和”とは、主体性があつて“和”するものであり、“同”は主体性を失くすことで“同”することなので、“君民一体”である日本の国の姿は世界のどこの国にも見ることができない独自のもので非常に美しい理想的な国家統治の形である」と力強く語られました。最後に「日本人として生まれて来たことの有難さを認識し、日本が二千年もの歴史を持つてゐる存在であることをじっくり噛みしめ、さうしたことを次の世代にも繋げていかうと思へば、私たちは今の時代をどう生きて行くべきかが見えて来るのではないでせうか」と分かり易い言葉で皇室と国民の間柄を述べられました。先生のお話を聞きながら、昨年の東日本大震災の際、被災者の苦しみ悲しみを我が事

のやうに思はれた両陛下の御心が偲ばれてきました。

本合宿では一貫して、戦後の占領政策によつて失はれた文化・伝統・歴史の回復を念願して営んで参りましたが、依然として、国民の多くは、国家意識が希薄で韓国や中国に領土を侵犯されても「平和理論」で通さうとしてゐます。領土は命を賭して守る意志がなければ守れません。その意志を若者から奪つてゐるのが、憲法であり、日教組教育であります。若者が澁瀬とした精神を取り戻すためにも憲法を一日も早く改正しなければなりません。

幸ひに、本合宿では「和歌の相互批評」といふ時間が設けられ、班友が創作した和歌を班友の心になつてお互に批評添削し心を通ひ合はす時間があります。それによつて他者の気持を理解し考へる習練が出来、*“和”*をも実感することが出来ました。

衆議院選挙は終りましたが、今度こそ、国家意識を高め、戦後の占領政策から脱却し、世界に誇れる強い日本を目指し、これまで失はれた国益を取り戻してほしいものであります。

ここに編じたこの「感想文集」は合宿最後の帰り際に走り書きで書かれたもので、充分意を盡せないものではありませんが、精魂を傾けて過ごした合宿の日々の経験を書き留めてくれたものです。紙面の都合で全文を載せられないのが残念ですが、是非とも精読賜りますやうお願いいたします。

この文集の編集に十余名の会員が休日をさいて取組んでくれました。また、この合宿を運営された運営委員長の廣木寧さんをはじめ運営委員の方々、指揮班長の澤部和道さんおよび指揮班の方々を中心に心から感謝いたします。

最後になりましたが、この合宿教室事業を実施するに当り、今年もまた、各界からお寄せいただいたご支援に対し、会員一同に代り心から厚く御礼申し上げます。

来夏（平成二十五年）の「第五十八回合宿教室」は八月二十二日（木）から二十五日（日）の三泊四日間、神奈川県厚木市の「市立七沢自然ふれあいセンター」で開催します。

詳細の合宿案内パンフレットは三月ごろ配布予定です。多数の皆様のご参加をお待ちいたします。



第57回全国学生青年合宿教室（平成24年8月16日～19日） 於「国立阿蘇青少年交流の家」

参加者

（学生班）（算用数字は参加学生数）

東北大学1 東京大学2 東京工業大学1 一橋大学1 早稲田大学2

慶應義塾大学1 明治大学1 國學院大學1 中央大学1 専修大学1

明星大学1 法政大学1 皇學館大學1 立命館大学2 大阪大学2

追手門学院大学1 九州大学1 九州工業大学3 九州産業大学1

福岡大学8 西南大学1 長崎大学1 長崎国際大学1 熊本大学1

折尾愛真短期大学1

細田学園高等学校1

アメリカンスクール・イン・ジャパン高等学校1

計 四十名（うち女子三名）

（社会人参加者） 二十八名（うち女子六名）

（招聘講師） 二名

（国民文化研究会） 六十五名

（事務局・アルバイト） 九名

（見学者・慰霊祭協力） 八名

総計 一五二名

— “合宿教室” 57年の歩み—

回数	年度	開催地	参加人員	主 要 講 師
1	昭和31年	霧 島	92	広田洋二・日下藤吾・川井修治
2	〃 32年	福 岡	127	竹山道雄・高山岩男・浅野晃
3	〃 33年	佐 賀	72	勝部真長・木下彪・森三十郎
4	〃 34年	阿 蘇	160	花田大五郎・中山優・野口恒雄
5	〃 35年	雲 仙	200	木内信胤・花田大五郎・佐藤慎一郎
6	〃 36年	雲 仙	203	小林秀雄・木内信胤・津下正章
7	〃 37年	阿 蘇	215	福田恆存・木内信胤・黒岩一郎
8	〃 38年	雲 仙	202	竹山道雄・木内信胤・木下広居
9	〃 39年	桜 島	202	小林秀雄・広田洋二・木内信胤
10	〃 40年	大 分	215	岡潔・花見達二・木内信胤・夜久正雄
11	〃 41年	雲 仙	240	福田恆存・木内信胤・戸川尚
12	〃 42年	阿 蘇	336	林房雄・太田耕造・木内信胤
13	〃 43年	霧 島	353	竹山道雄・高谷寛蔵・木内信胤
14	〃 44年	阿 蘇	403	岡潔・木内信胤・木下道雄・奥田克巳
15	〃 45年	雲 仙	491	小林秀雄・木内信胤・桑原暁一
16	〃 46年	霧 島	302	村松剛・木内信胤・戸田義雄
17	〃 47年	阿 蘇	402	木内信胤・山本勝市・胡蘭成
18	〃 48年	雲 仙	433	村松剛・木内信胤・山口宗之
19	〃 49年	霧 島	528	小林秀雄・木内信胤・戸田義雄
20	〃 50年	阿 蘇	435	福田恆存・木内信胤・夜久正雄
21	〃 51年	佐世保	372	長谷川才次・村松剛・木内信胤
22	〃 52年	雲 仙	332	木内信胤・衛藤藩吉・高木尚一
23	〃 53年	阿 蘇	440	小林秀雄・木内信胤・松本唯一
24	〃 54年	霧 島	268	木内信胤・高山岩男・山田輝彦
25	〃 55年	雲 仙	431	福田恆存・法眼晋作・宝辺正久
26	〃 56年	阿 蘇	353	齋藤忠・村松剛・青砥宏一
27	〃 57年	霧 島	321	齋藤忠・黛敏郎・幡掛正浩
28	〃 58年	雲 仙	327	齋藤忠・小堀桂一郎・長内俊平
29	〃 59年	阿 蘇	302	吉岡一郎・小堀桂一郎・加納祐五
30	〃 60年	阿 蘇	249	市原豊太・高村坂彦・小田村四郎
31	〃 61年	島 原	294	江藤淳・村松剛・小柳陽太郎
32	〃 62年	阿 蘇	269	小堀桂一郎・鈴木一・關正臣
33	〃 63年	島 原	227	児島襄・小堀桂一郎・加納祐五
34	平成元年	島 原	204	村松剛・山田輝彦・国武忠彦
35	〃 2年	阿 蘇	204	黛敏郎・小柳陽太郎・占部賢志
36	〃 3年	厚 木	244	田久保忠衛・国武忠彦・山内健生
37	〃 4年	阿 蘇	257	村松剛・平川祐弘・奥富修一
38	〃 5年	厚 木	271	村松剛・佐伯彰一・白濱裕
39	〃 6年	阿 蘇	253	徳岡孝夫・小堀桂一郎・網田洋一
40	〃 7年	厚 木	240	小川三夫・長谷川三千子・東中野修道

回数	年 度	開催地	参加 人員	主 要 講 師
41	◇ 8年	阿 蘇	171	竹本忠雄・伊藤哲夫・坂口秀俊
42	◇ 9年	厚 木	213	西尾幹二・竹本忠雄・酒村總一郎
43	◇ 10年	阿 蘇	193	小堀桂一郎・徳岡孝夫・志賀建一郎
44	◇ 11年	富 士	178	井尻千男・長谷川三千子・山口秀範
45	◇ 12年	阿 蘇	154	小堀桂一郎・東中野修道・布瀬雅義
46	◇ 13年	富 士	150	伊藤哲夫・長谷川三千子・小野吉宣
47	◇ 14年	江田島	244	中西輝政・山内健生・青山直幸
48	◇ 15年	富 士	171	小堀桂一郎・伊藤哲夫・占部賢志
49	◇ 16年	阿 蘇	169	中西輝政・小田村四郎
50	◇ 17年	伊 勢	219	長谷川三千子・松浦光修
51	◇ 18年	霧 島	191	井尻千男・吉田好克・占部賢志
52	◇ 19年	奈 良	175	小堀桂一郎・小川三夫・小野吉宣
53	◇ 20年	伊 勢	150	伊藤哲夫・占部賢志
54	◇ 21年	厚 木	160	長谷川三千子・ペマギヤルボ・占部賢志
55	◇ 22年	阿 蘇	151	中西輝政・小柳左門
56	◇ 23年	江田島	141	小堀桂一郎・山内健生
57	◇ 24年	阿 蘇	152	竹田恒泰・小柳志乃夫
累計・参加人員			14,452名	

平成24年 第57回全国学生青年“合宿教室”日程表 (阿蘇)

	8月16日(木)	8月17日(金)	8月18日(土)	8月19日(日)
6:00		起床(6:00) 清掃	起床(6:00) 清掃	起床(6:00) 清掃
7:00		(6:45) 朝の集ひ(青少年交流の家) (7:15)	(6:45) 朝の集ひ(青少年交流の家) (7:15)	(6:45) 朝の集ひ(青少年交流の家) (7:15)
8:00		朝の集ひ(国文研) 朝食	朝の集ひ(国文研) 朝食	朝の集ひ(国文研) 朝食
9:00		(8:30) 講義 「日本はなぜ世界で一番人気があるのか —日本の歴史と皇室のありがたさ—」 作家・慶應義塾大学講師 竹田 恒泰 先生	(8:30) 講義 「皇室と国民—感応相称の世界—」 興銀リース㈱ 執行役員 小柳志乃夫 先生	(8:30) 講義 「先人の言葉に学ぶ」 元東急建設衛生部取締役 奥置修一 先生
10:00		(10:00) 質疑応答	(10:00) 班別研修	(9:30) 班別研修
11:00		(10:30) 写真撮影		(10:40) 移動
12:00	受付: 13:00 開始 開会式: 14:30 開始	(10:50) 班別研修		(10:50) 全体感想自由発表
13:00	(14:30) 開会式 (挨拶) 国民文化研究会 理事長 上村和男 氏 オリエンテーション 合宿運営説明及び諸注意伝達 合宿運営委員長 廣木 康 氏 合宿指揮班長 澤部和道 氏	(12:00) 昼食	(12:00) 昼食	(11:30) 地区別懇談
14:00		(12:45) 短歌創作導入講義 祐誠高等学校教諭 小林国平 先生	(13:00) 会員発表	(12:00) 感想文執筆 第二回短歌創作
15:00		(13:45) レクリエーション 阿蘇火山登山 草千里散策	(13:30) 創作短歌全体批評 国民文化研究会副理事長 澤部壽孫 先生	(12:45) 閉会式
16:00	(15:30) 自己紹介及び班別研修 「日本への回帰 第47集」 輪読		(14:30) 班別短歌相互批評	(13:15) 閉会式: 13:15 終了 (昼食・解散)
17:00		(17:30) 夕食 入浴 休憩	(17:30) 夕食 入浴 休憩	
18:00			(19:30) 慰霊祭説明 山口県立熊毛南高等学校教諭 實達矢太郎 先生	
19:00			(20:00) 慰霊祭	
20:00	(19:30) 合宿導入講義 「一度は考へておくべきこと」 元熊本県立大津高校長 白濱 裕 先生	(19:30) 古典講義 「西郷隆盛『南洲輪讀訓』」 国民文化研究会 副理事長 今林賢郁 先生	(21:00) 班別研修	
21:00	(21:00) 班別研修	(21:00) 班別研修	(22:30) 就寝	
22:00	(22:30) 就寝	(22:30) 就寝		
23:00				

第五十七回 “合宿教室” のあらまし

第一日目

(八月十六日・木曜日)

第五十七回全国学生青年合宿教室は、熊本県阿蘇市「国立阿蘇青少年交流の家」にて開催された。当施設は、阿蘇五岳の一つ中岳を眼前に臨む場所に位置し、周囲を青々とした芝生に囲まれた高原にある。朝夕には隣接する牧場の牛の憩ふ様も間近に見え、酷暑の中にも高原の風を得て涼を感じることに出来る素晴らしいロケーションにある。全国から集ひ来た参加者は、それぞれの思ひを胸に、受付を済ませ速やかに開会式に臨み、三泊四日の合宿教室が幕を開けた。

開会式

合宿教室は九州工業大学四年脇勇貴君の開会宣言で幕を開けた。国歌斉唱に続いて、あまたの祖先の御霊に対して黙禱が捧げられた。主催者を代表して上村和男理事長は、合宿教室五十七年間の歩みを振り返りつつ、「戦後日本は国の歴史を正しく教へてこなかった。道を間違へたと気づいたら元へ戻るのが登山の鉄則である。今こそ学問の道筋を正すために、自分の国をしっかり見つめる学問を始めなければならない。領土が侵されやうとしてゐる時に傍観してゐては日本が日本でなくなる。この合宿を学問の原点に戻つて考へ直す切つ掛けにして欲しい」と述べた。次いで東京大学四年の高木悠君は、過去の参加経験を踏へて、

「講師の言葉、班員の言葉に耳を傾け理解するやうに努めたことは自分の力になった。他者の話を正確に聞くやうに努めて、心を通ふと自分の心の躍動を感じる。思ひを共有する喜びを感じる合宿にして行きませう」と訴へた。廣木寧合宿運営委員長は「一年の準備を経て開会に漕ぎ着けた。自分は学生時代、この合宿教室で日本の歴史の真髄を学んできた。そして日本の歴史の中を旅してきた。阿蘇の地まで足を運んで来られた参加者の皆さんには、ぜひ心を働かせて合宿に取り組んでもらひたい。自分の国の歴史の中の風景をよくよく見詰め味はってもらひたい」と述べた。

合宿導入講義

「一度は考へておくべきこと」

元 熊本県立天津高等学校校長 白濱 裕 先生



冒頭、「今年、昭和二十七年に講和条約が発効し、主権を回復してから六十年目を迎へる。最近の尖閣や竹島などの領土問題への対応をみると、かつて三島由紀夫が予言したやうに、『無機質な、からつぽな、ニュートラルな、中間色の、富裕な、抜け目が無い、ある経済的大国』と評しても良い状況にある。家族の絆の稀薄化、若者からは『学び続ける精神や教養への敬意』が失はれ、政治家は『よつて立つべき国家の根』を喪失したまま空疎な改革を叫ぶばかりだ。そこから抜け出すためには、『国家の根の喪失』の自覚とそれを取り戻す『意志の持続』が不可欠である」と、長谷川三千子先生の文章を引用して、訴へられた。

そして、終戦直後の、教育基本法の制定や教育勅語の廃止などで精神的武装解除を企図したGHQの占領政策や、教育現場を支配した日教組の跳梁の実態に触れ、教育再生のために、いま一度「教育勅語」の精神を見直すべきであるとして、起草の経緯や、主に起草に当たった井上毅の努力の跡を辿られた。

最後に、東日本大震災の折、日夜救助に当たった自衛隊や殉職した女性役場職員など「義勇公に奉じた」人々の中に、教育勅語

の精神は今に生きてゐると締めくくられた。

講義終了後、参加者は各班室に戻り、導入講義についての班別研修を行った。まづ、講義を聴いて班員一人一人がどのやうに受け止めたかについて話し合ひ、講義内容を正確にたどりながら、講師の最も伝へたかつたこと、重要なことは何かを確認し、そのうへで各々の思ふことを論じ合つた。なほ、この班別研修は、以後の各講義の後にも行はれた。緊張のせるか、初めのうちは意見も少なく発言も限られてゐたが、お互ひに打ち解けるに従ひ次第に討論も活発となり、時に反発し時に共感し合ひながら、班員相互の交流が深められていった。

第二日目

(八月十七日・金曜日)

合宿の日程は「朝の集ひ」から始まる。今合宿の「朝の集ひ」は、「青少年交流の家」の合同の朝の集ひに参加して、他団体と共に行はれた。すがすがしい空気の中、国旗掲揚の後体操を行つて一日の研修を新たに迎へた。

合同の集ひのあと、合宿参加者には毎朝一枚、唱歌のプリントが配布され、歌の紹介と皆での合唱が行はれた。各唱歌は次の通りである。

二日目 (八月十七日) 「われは海の子」

三日目 (八月十八日) 「水師營の会見」

四日目 (八月十九日) 「冬の夜」

講義 「日本はなぜ世界で一番人気があるのか―日本の歴史と皇室のありがたさ―」

作家・慶応義塾大学講師 竹田恒泰 先生



先生は、現憲法第一章「天皇」を大学院で一年間かけて講義されてゐて、「憲法を語るといふことは、日本を語る、歴史を語ることに他ならない。そして天皇を語ることもある」と述べ講義を始めた。そして、「大日本帝国憲法に於ける天皇の権能はポツダム宣言受諾と共に失はれ、現憲法ではあくまで象徴にすぎない」とする憲法学会の通説を批判された。そして、戦前は天皇主権であったが戦後は国民主権になったかのやうに書いてゐる高校教科書は間違ひだと述べられ、「我国の主権は天皇お一人にあるのでもなければ、国民一人一人にあるのでもない。天皇と国民が一体となった『君民一体』の姿こそがわが国の主権者の姿である」とお述べになった。

続いて「君民一体の日本の国の姿は、世界のどこの国にも見ることが出来ない独自の非常に美しい、理想的な国家統治の形である。日本はどんな国であるかを一言で言へば、『和の国』であると言ふ他はない」と述べられた。「日本人はまづ調和を大切にし、家族があればその中の和を、そして近所・地域のひととの和を大切に、さらには会社の中でも外国との関係でも和を大事にし、つひには大自然との調和も大事にして来た」と、日本人の心の持ち方や気質について話された。

次に先生は、日本が二千年以上続いてゐるのは何故かと問はれ、日本では武士同士の戦ひはあったが、一般人を巻き込んだ十七世紀のドイツ三十年戦争や近くは中東戦争に見られる他の宗教を否定する宗教戦争のやうな「戦争らしい戦争」を経験して来なかったことを挙げられた。そして日本では何故、宗教戦争がなかったかについて、「日本はもともと八百万の神々がをられて、仏教が伝来した時もそれを受け入れ、むしろ仏教により国を守り安泰にしていくなといふ鎮護国家を目指した」と述べられ、さらに「日本は世界最古の国家であり、中国やエジプトは日本より古い国のやうだが王朝はすでに亡び、現在の中国は六十三年前に共産党が創った新しい国家で、エジプトは今は共和国である。日本の次に古い国はデンマークでも千数十年、三番目がイギリス

で九百四十年である」と指摘された。

最後に「私たちはまづ、日本人として生きてきたことの有難さを認識し、日本が二千年もの歴史を持つ存在であることをじっくり噛みしめて、それを次の世代に手渡していかうと思へば、今の私たちの時代をどう生きて行くべきかが見えて来るのではないでせうか」と述べられた。

短歌創作導入講義

祐誠高等学校教諭 小林 国平 先生



初めに、十四年前の学生時代に阿蘇での合宿教室で初めて詠まれた歌を紹介され、短歌相互批評で班員と感動を共有した時の喜びの体験を語られた。「夕顔」の成長する様子を詠んだ祖父に当る小林國男先生の七首の歌を紹介しつつ「短歌に触れる」意味合ひを「カメラは景色を写すが、短歌はその時の気持ちを中心に刻む作業である」と説明された。続いて、作歌の心構へとして『短歌のすすめ』序文を引きながら、三十一文字の中に感動をありのままに詠むこと、「一首一文」「字余り」「連作」などを、昨夏の江田島合宿の折の参加者詠草を具体例に示しながら作歌上の留意点を懇切に説かれた。

最後に、小林國男先生が学友、高瀬伸一さん（昭和二十年七月戦死）の遺歌《荒れくるふ海のはたては丈夫まぢらの生命のすてどいさぎよくゆけ》に曲譜を付けられたが、それを独唱し、「終戦後五十年以上の年月を経ても、高瀬さんの遺歌は、祖父にとっても同窓の小柳陽太郎先生にとっても一刻も忘れることのない歌であった」と述べられた。

レクレーション（阿蘇火口登山・草千里散策）

短歌創作を兼て、一同は四台のバスに分乗して、阿蘇火口から草千里を回った。火口では噴煙の濃度が上がったとのことで、急遽下山を命じられるといふハプニングがあった。

古典講義 「西郷隆盛」「南洲翁遺訓」

国民文化研究会副理事長 今林賢郁 先生



まづ最初に、坂本龍馬、増田宋太郎、内村鑑三の言葉を引用しながら、西郷の器量の大きさ、圧倒的な存在感と人望に思ひを馳せられた。

西郷の語録を収めた『南洲翁遺訓』成立の由来について、「西南の役で逆臣となった西郷が帝国憲法発布（明治二十二年二月十一日）を機に名誉回復されたことで、翌年旧庄内藩（山形）の人たちがその語録を編んで頒布したのが始まりであるが、そもその発端は、明治維新の際、新政府軍に敵しく対峙して敗れた庄内藩に対する西郷（征討軍総参謀）の寛大な扱ひに、庄内藩の主従が感激したところにあつた」と説かれた。庄内藩では維新後、藩士を鹿兒島に派遣し西郷の下で学ばせてゐる。四十三箇条の語録の中から八箇条を取り上げて、西郷の「敬天愛人」の思想、文明観、軍事・外交のあるべき姿等々について講義を進められた。

最後に「節義廉恥を失て、国を維持するの道決して有らず、西洋各国同然なり。上に立つ者下に臨で利を争ひ義を忘る、時は下皆な之に倣ひ、人心忽ち財利に趨り、卑吝の情日々長じ、節義廉恥の志操を失ひ、父子兄弟の間も錢財を争ひ、相ひ讐視するに至る也。此の如く成り行かば、何を以つて国家を維持する可きぞ」といふ『遺訓』の言葉に関連して、徳川吉宗に仕へた儒学者・室鳩巢の『明君家訓』にある「節義の士」を取り上げ、「節義の士」が守るべき行為―私欲に走らず、諂はず侮らず、約束をたがへず、恥を知り、してはならないことはしない、人の悪口は言はない、生き甲斐を持ち、義と理を重んじる―等々について説かれた。「これらの一つでも二つでも各人が自分のものにして『平成の節義の士』たらんと努めて欲しい。それが「国

を維持する」ことに繋がる」と述べられた。

第三日目

(八月十八日・土曜日)

講義 「皇室と国民―感応相称の世界―」

興銀リース(株)執行役員 小柳 志乃夫 先生



冒頭、遠藤周作著『深い河』の「生活では多くの人と交ったが、人生で出会ったものは母と妻の二人であった」との一節を引きつつ、天皇は生活ではなく人生に関はるご存在だと感想を述べられた。次いで加納祐五先生の「日本の国柄の真髄は・・・国民の上を思はせられる天皇の御心に感応して、これにお応へしようとする国民との間の君灵感応相称の精神世界にある」とのお言葉を引いて、まづ天皇の御心を御歴代の御製に辿られた。孝明天皇の御製「澄ましえぬ水にわが身は沈むともにごしはせじなよろづ国民」について、わが身を顧みず国民を護らうと神に誓はれた御製であり、その神は国民を慈しんで来られた天皇の御祖先であって、神への祈りと国民への思ひは一つであられたと話された。同様の捨身の御製として昭和天皇の終戦時の御製を紹介され、さらに、かうした国民への深い思ひは今上陛下にも受け継がれてみると、震災時の御製を解説された。

君民の感応相称の史実として明治天皇と昭和天皇のご巡幸をとりあげて、それぞれの御製と国民の歌や文章を紹介され、幼子が親に出会った折のやうな国民の感懐と、そこから国づくりに至す現実的な力が生れた様子を偲んでゆかれた。さらに昭和天皇の「鹿児島湾上の聖なる夜景」の逸話とその場において天皇をお送りした子どももの詩を紹介され、「感応相称のまごころがここに生きてゐる、巡幸を政治的パフォーマンスと捉へる現代の学者には、この内的感懐を伴った皇室と国民の関係は理解できまい」

と指摘された。最後に夜久正雄先生の「国をおもふことが天皇陛下のお心をしのぶことと一致するのが日本の国がらではないでせうか」との文章を引用して御製を拝誦する意義について語られた。

会員発表

福岡労働局総務部 古川 広 治 氏



学んでゐることが現実の生活に活かされてゐるのか、何のために学んでゐるのか、時折不安に思ふことがあるが、そんな疑問にも応へてくれるのが、合宿教室に参加された先輩方の文章を収載した『戦後世代からの発言―真正なる日本人を目指して―』（国文研叢書No.28・29）であると、読後の所感を語り、二人の言葉を紹介した。「自分が本当に美しいと感ずることを自らの日々の生活に一つ一つ実現していくこと」「日本人としての本当の生き方を自分自身の心に問ひつつ求めていきたい」。最後に「人生とは何なのか」を問ふ学問があることを知った喜びを語った。

日本ユニシス(株)北海道支店 大 町 憲 朗 氏



初めて、この合宿教室に参加したのは三十九年前で、天皇陛下のことが解らず「国に命を捧げる」といふことが理解できないまま合宿を終へた。その後の春の小合宿で、北島照明先輩から「御製を百回読みなさい。君は理屈だけで物を考へてゐる」と、一喝されて目が醒める思ひで御製を読んだことが転機となつたと、思ひ出を語った。その後、しばらく合宿参加が途絶えてゐたが、澤部壽孫先輩から、「今回来れなかつたら、君は精神的に死ぬよ」と電話をもらひ奮起したのが三年前で、それが

昨年秋の札幌合宿の開催に繋がった。今後も、北の地にも友を求め学びを広げたいと述べた。

創作短歌全体批評

国民文化研究会副理事長 澤部壽孫先生



二日目午後、短歌創作を兼たレクレーションの後、参加者全員から短歌が提出され、その中から選別された二百二十首を収めた「歌稿」をもとに全体批評が行はれた。

各班から数首づつ取り上げて、表現上の問題点を丁寧に具体的に指摘しながら正していかれた。作者の見たまま、感じたままの素直な心に立ち返って、その感動を言葉にしていくことの大切さを、実作を通して示された。時には笑ひ声もおきる中、正確な表現に直されることで、作者の思ひが伝はる歌に変貌していく「短歌の世界」の表現の深さを実感していく時間となった。また日本の歴史や文化における短歌の素晴らしさについても言及され、「豊かな経験が豊かな心を育んでいく。短歌創作は豊かな心を育む上で大きな力を持つてゐる。合宿が終つてからも是非短歌に親しんでほしい」と結ばれた。

班別短歌相互批評

全体批評のあと班別短歌相互批評が行はれた。自分の心の動きを正確に表現し相手に伝えることの難しさ、また人の言はんとしてゐることを正確に受け止めることの難しさを実感させられた。一首一首の短歌を、班員全員が納得できる表現にしようとする力し時間を超過してしまふ班も多くあったが、その自分自分の心、相手の心をじっくりとみつめるといふ貴重な体験をすることが出来た。

慰霊祭

慰霊祭に先立って、山口県立熊毛南高等学校教諭の寶邊矢太郎先生が慰霊祭についての説明をされた。「この慰霊祭は、戦時平時を問はず、祖国日本のために尊い命を捧げられた、全ての祖先のみ霊をお慰め申し上げることを目的としてゐる。慰霊祭に参加する者は、自らの心を整へ、今に生きる者として先人の思ひを受け継ぐといふ気持ちで臨んで欲しい」と説かれた。次いで参列の際の実際の作法（低頭、最敬礼、二拝二拍手一拝）を示された。最後に、祭儀で奉唱する『海ゆかば』の練習を行った。

慰霊祭は、講義室裏手の小高い草原に設へた祭壇の前に全員が整列して、星が瞬く音さへ聞えて来さうな静寂しじまの中、厳粛に執り行はれた。初めに山口秀範常務理事（株寺子屋モデル代表取締役）が三井甲之詠の「ますらをの悲しきいのちつみかさねつみかさねまもる大和島根を」の歌を朗詠、山の幸海の幸が献進され、次いで熊本県立熊本高等学校教諭の久保田真氏が御製を拝誦し、大岡弘理事（元新潟工科大学教授）が祭文を奏上した。そして、一同による「海ゆかば」の奉唱、玉串拝礼、撤饌の儀と続いた。

左は拝誦された「御製」と奏上された「祭文」である。

御製拝誦

明治天皇

虫聲

さまざまの蟲むしのこゑにもしられけり生きとしいけるもののおもひは
(明治四十四年)

もの学ぶ道にたつ子よおこたりにまされる仇あだはなしとしらなむ
(明治三十八年)

よもの海みなはらからと思ふ世になど波風のたちさわぐらむ
(明治三十七年)

昭和天皇

爆撃にたふれゆく民の上をおもひいくさとめけり身はいかならむとも

身はいかにもなるともいくさとめけりただたふれゆく民をおもひて（昭和二十年）

ふりつもるみ雪にたへていろかへぬ松ぞををしき人もかくあれ（昭和二十一年）

今上天皇

東日本大震災の津波の映像を見て

黒き水うねり広がり進み行く仙台平野をいたみつつ見る

東日本大震災の被災者を見舞ひて

大いなるまがのいたみに耐へて生くる人の言葉に心打たるる

共に喜寿を迎へて

五十余年吾を支へ来し我が妹も七十七の歳迎へたり

仮設住宅の人々を思ひて

被災地に寒き日のまた巡り来ぬ心にかかる仮住まひの人（平成二十三年）

祭文

いま、われらは、しきしまの大和島根の南にそびゆる阿蘇山のふもと、緑色濃きこれの丘べの草原を祭りのにはと定めまつりて、とこしへにみ国守りまします遠つみ祖たちのみ霊、また、み国に現し身捧げたまひて、み国のいのち守りたまひし千万のみ祖たちのみ霊、また、現し世の生くる限りを、み国のいのちいや高く育みたまひ、いのち過ぎたまひけるみ祖たちのみ霊を、招きまつりをろがみまつりて、ささやかなれども、海の幸、山の幸くさぐさ供へまつりて、み霊なごめの

み祭り仕へまつらむとす。

ここに謹み告げまつらくは、この美はしき大和島根を、汝命いまたまことたちのみ心受け継ぎて、素直にてををしく、心豊かなる人々の集ふ所と永久とこしほに栄えしめんがため、われらここに集へるものら、竹田恒泰先生をはじめ諸先生のお教へに心かたむけ、班別研修に心ひらき語りかはしつづつ、はたまた、この世に在りましし日のみ祖たちのきびしき、またおほらかなるつとめを偲びまつりつづつ、はたまた、言霊ことばたまの幸はふ大和言葉に相ともに触れ、相ともに、その妙なる力をわれらが言葉に生き通かよはしめんねがと希ねがひつづつ、学びを重ねて、はや三日目の夜を迎へぬ。

顧みれば、大東亜のみ戦いくさにみ国敗れし時ゆ、己が力でみ国守るを阻む、「悪しき国のおきて」を押しただき来つるが故に、み民われら、み国守らむとする健たげき心の自づと湧くきいづる国風は、つとに弱まり、また、み国の国柄を調べべきはむる学びの道の狭くなりしが故に、「女性宮家」創設なる「おぞましき、はかりごと」の、出でくる有り様とはなりぬ。み国のいのち、また、み民のちからの現れ出づるを妨ぐる、その大本おほもとの曲れることごとを、いま、あるべき姿、正しき姿に正さでは、訪れ来たらむとするみ国の危あやふきに処する能はず。われら力足らざれども、現うし代にさまざまに積りなすまがごとを、誤ることなく見分け見分けて進みゆかむと誓ひまつらむ。

畏かしこかれども汝いましみ祖たちのみ霊よ、願はくは、われらの足らはぬ心のうちを現うつしくみそなはしたまひ、み民われらもろとも、わが大君天すめらみこと 皇の大きみ心を偲びまつりつづつ、心を合はせ力を協せて、み国の栄さかゆく道を切り拓かんと努むるわれらがゆくてを、導きたまへ守らせたまへと、合宿教室参加者一同に代はり大岡弘、謹み敬ひ畏かしこみ畏みも白まをす。

第四日目

(八月十九日・日曜日)

講義

「先人の言葉に学ぶ―しきしまの道について―」

元 東急建設(株)常務取締役

奥 富 修 一 先生



「合宿教室は日程の三分の一以上が短歌に割かれてゐるところに特徴があつて、参加者の方にも「短歌が心の鏡」となるやうな道(しきしまの道)を歩んでいただきたい、それがこの合宿の願ひである」と言はれた。続けて、万葉集の山上憶良「好去好来の歌」を引用し、「皇神すめかみの厳いつくしき国言霊こたたまの幸さいわいはふ国」(わが国は天皇様が統治されることによつて永遠に栄へる国であり、和歌によつて人の心の通ひあふ国である)と歌はれた国柄は、一筋に伝へられて千年の後、明治天皇様が、この道を「しきしまの道」として強く認識されたのである、と説明された。さらに、和歌(短歌)の原理は「まこと」にあり、この伝統を受継いだのが明治維新の志士、中でも吉田松陰の『留魂録』の歌は群を抜いてゐる、として辞世の句を詠みあげられた。また夜久正雄先生の「しきしまの道はいまも日本文化の中核であり、日本人の心のバックボーンである：氣づく人が少ないのである」のお言葉に触れて、「合宿教室の『願ひ』もここにある。皆さんには是非氣づいて欲しい」と強く述べられた。最後に先生は「敗戦によつて失はれた貴重な文化を取り戻す道は、我々自身が『しきしまの道』を歩む、といふ身近なところにある」と結ばれた。

全体感想自由発表

次々に登壇した参加者は率直に胸の裡を語った。「学問には実感や感動を伴って分るといふこと、つまり頭だけではなく心が必要だといふことが初めて分った」「昭和天皇の終戦時の御製に触れて涙がこぼれた」「短歌創作を通じて、自分の感情を表現することの難しさが分り、明治天皇の御製の凄さを感じた」「平和な国に生れて良かったと思つてゐたが、日本に生れて良かったといふ考へになつた」「先人が書物に残された思ひを、まづは真摯に受け止め、その上で自分の意見を形成していきたい」「西郷さんの話を聞いて、自然に涙が出た。日本の素晴らしさを知り、もつと本を読みたくなつた」「短歌を通して自分に向き合ふことができた」「自分の人生を立派に生きて子や孫に見せていきたい」「心の深い次元で物事を知ることが出来、有難かつた」「客観的に歴史を見ると、本来自分につながりのあつたはずの歴史が自分から離れたものになつてしまふといふことが分つた」「合宿が終つてしまふのは寂しいが、むしろこれがスタートだと思ふ。ここで得た良き友との縁を大切にし、これからもつながりながら勉強していきたい」…。

閉会式

力強い国歌斉唱に続いて、磯貝保博副理事長は主催者を代表して「日本は和の精神を持つ国であり、世界最古の連続する歴史を持つ国であることや、御製を通じて天皇の御存在、天皇と国民との感応相称の精神世界の実在を実感されたと思ふ。大学や職場に戻つても、折々ここで学んだこと感じたことを思ひ起して精進して欲しい」と述べた。学生代表挨拶で九州工業大学修士二年小林達郎君は「戦後教育によって本来の日本の精神が歪められ、歴史観や文化教育の伝承に危機感を覚えた。日本の伝統を正しく学んでいきたい」と、今後の意気込みを語つた。次いで廣木寧合宿運営委員長は、自身の学生生活や寮での体験を振り返つて「仲間との日常の勉強会や共同生活が学生を成長させる。合宿の講義内容を日々、紡ぐことが日本の歴史を旅することと同義であり、今後の日本や後世のために合宿後も学問を続けていくことが我々の責務である」と熱く呼び掛けた。最後に立命館大学一年藤新朋大君が閉会を宣言して、合宿教室の幕は閉ぢられた。

助言者の紹介

(社)国民文化研究会理事 東海ゴム工業(株)顧問	上村 和男	元 キューピー(株)	山本 伸治
(社)国民文化研究会副理事長 (株)伊勢利代表取締役	今林 賢郁	元 富山県立富山工業高等学校教諭	岸本 弘
(社)国民文化研究会副理事長 元 (株)講談社	磯貝 保博	S I S(株)	内田 巖彦
(社)国民文化研究会副理事長 元 日商岩井(株)	澤部 壽孫	元 浦和市役所	井原 稔
(社)国民文化研究会事務局長	稲津利比古	国立病院機構 都城病院院長	小柳 左門
拓殖大学日本文化研究所客員教授	山内 健生	九州大学名誉教授	福島 義榮
(株)寺子屋モデル代表取締役社長	山口 秀範	(株)MCエバテック	清水昭比古
元 小田原市立矢作小学校校長	岩越 豊雄	(社)交通事故総合分析センター理事長	天本 和馬
元 新潟工科大学教授	大岡 弘	元 福岡県立筑紫丘高等学校総括教頭	小田村初男
元 東急建設(株)常務取締役	奥富 修一	元 大手監査法人パートナー	小林 至
(株)石村萬盛堂代表取締役社長	石村 僖悟	山口県立熊毛南高等学校教諭	牧 美喜男
(株)IHIEアロスペース	内海 勝彦	鳥栖市役所	寶邊矢太郎
興銀リース(株)執行役員	小柳志乃夫	宮崎県立都城商業高等学校校長	西山 八郎
日章工業(株)代表取締役	藤新 成信	日本ユニシス(株)北海道支店	竹下 鉄郎
新明電材(株)常務取締役	飯島 隆史	羽後信用金庫石脇支店	大町 憲朗
昭和音楽大学名誉教授	國武 忠彦	福岡県立博多青松高等学校教諭	須田 清文
元 福岡県立直方高等学校教諭	小野 吉宣	日本郵便大村支店	籾 寛明
中島法律事務所弁護士	中島 繁樹	合宿運営委員長 (株)寺子屋モデル役員	橋本 公明
熊本市役所	折田 豊生	若築建設(株)九州支店	廣木 寧
元 熊本県立大津高等学校校長 (学)熊本壺溪塾学園	白濱 裕	福岡県立朝倉高等学校教諭	池松 伸典
鹿児島信用保証協会監事	野間口俊行	折尾愛真短期大学講師	黒岩 真一
インフリッチ工業(株)会長	今村 宏明	北九州市立医療センター技師	松田 隆
		大阪湾広域臨海環境整備センター	森田 仁士
			久米 秀俊

南国殖産(株)
 元 (株)アルバック
 熊本県立第二高等学校教諭
 福岡県立鞍手高等学校教諭
 熊本市立湖東中学校教諭
 熊本県立熊本高等学校教諭
 北九州市役所
 福岡労働局
 日本青年協議会
 高知市立旭中学校教諭
 熊本市役所
 アサヒ飲料(株)
 東洋紡績(株)
 (株)寺子屋モデル講師
 (株)ハウインターナショナル
 祐誠高等学校教諭
 (株)ラック
 日本青年協議会
 新東電算(株)
 (株)ハウインターナショナル
 穴井木材工場

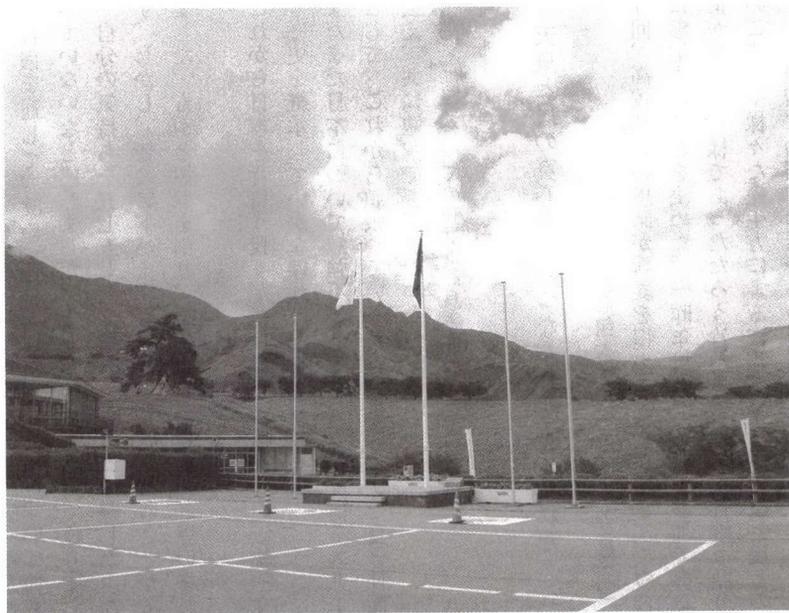
京田 清人
 北濱 道
 今村 武人
 日比生哲也
 山方富美子
 久保田 真
 西山 博文
 古川 広治
 松岡 篤志
 岡 つぐみ
 濱口 知久
 澤部 和道
 庭本秀一郎
 横畑 雄基
 桑木 康宏
 小林 国平
 高橋俊太郎
 三荻 祥
 大森 淳史
 谷口 耕平
 穴井 俊輔

合宿運営本部 廣木 寧・今村 武人・古川 広治
 指揮班 澤部 和道・久保田 真・小林 国平
 穴井 俊輔
 医務班 小柳 左門
 事務局 稲津 利比古・山本 伸治・高橋 俊太郎
 児玉 康子
 熊本高等学校 高倉 久恵
 熊本高等学校 若山 裕梨
 熊本高等学校 清田 小春
 熊本高等学校 鳥越 柰子
 中尾スタジオ 松永 和文
 北九州市立医療センター 森田 仁士

走り書きの感想文集

これは閉会間ぎはの一時間余で参加者全員に、三泊四日間の感想を走り書きで書いてもらったものです。「仮名遣ひ」は原文のまま掲載してあります。

なほ、各人の感想文の末尾に小さい活字で載せられてゐる和歌は、この感想文とともに提出された第二回目のものです。



第一班—男子学生—

自分はまだ何も知らないと感じた

(福岡大学 経 一年 高久保 良和)

今回、私は初めてこの合宿教室に参加しました。大学で週に一回の輪読会に参加しており、そこで廣木寧さんにこの合宿教室を勧められました。この時、私は「面倒臭いな」とか「出たくないな」とか思っていました。しかし、廣木さんが熱心に勧誘されるので参加したのですが、それが正解でした。この合宿での講義を受けて感じたことは、自分はまだ何も知らないということでした。高校生の頃には教科書に書かれたことを鵜呑みにして覚えることで知ったと錯覚していたのです。しかし、この合宿を通して、その錯覚に気付きました。

また、班別研修では、自分の考えと違う考えを聞いたり、意見を述べ合ったりして勉強になりました。

また、機会があれば参加したいと思います。

合宿教室の閉会式を終へて

さよならと友らと別れの時になり再び会はうと心に誓ふ

もつと短歌を作り勉強していきたい

(法政大学 法 一年 本多光雄)

今回、初めて合宿に参加させていただきました。最初は不安で緊張しましたが、非常に有意義なものとなりました。今回の合宿を通して、改めて日本の歴史や天皇について何も知っていないなど感じました。また、短歌を初めて作りました。自分の気持ちを五七五七七に組み込むことは難しかったです。しかし、皆のアドバイスもあり、完成させることができました。もつと短歌を創り、勉強していきたいと思いました。

これから日本を背負う我々が、日本の素晴らしい伝統や文化、歴史を継承していかなければなりません。

まだまだ日本について勉強不足ですが、この合宿をスタートとして、これから頑張っていきたいと思います。良き仲間に加え、共に勉強できて良かったです。

友だちと助け合つての和歌批評良き作品でき嬉しく思ふ

天皇と民の真心からのつながりが感じられた

(立命館大学 法 四年 吉富孝明)

今回、高校時代の恩師が講義を担当されると聞き、この合宿に参加することを決めた。一昨年以来二度目の参加である。

世が世なら宮様であつただらう竹田恒泰先生の軽妙な語り口のご講義や様々な先生方によるご講義では、天皇と民との限らない紐帯についてお話があつた。歌は心の中を写すものというが、天皇と民の真心からのつながりが、紹介された歌

などに感じられた。

翻って私自身はどうか。君主たる天皇陛下への敬意は常識に沿った意味合いによるもので、陛下と私との、私の心の中における心理的な距離感があつたように思う。そのことをこの合宿で認識した。天皇や皇室のことを身内のことのように慮ることが出来るように勉強していきたい。

今ありたる最古の国の裔ならば継ぎまた渡すは務めなりけり

友達と交流し絆を深めたい

（皇學館大學 文 四年 吉田裕史）

今回、この合宿に初めて参加させていただきました。両親から「もつと日本の良さを学んでほしい」と勧められ、自身も日本の良さを学びたいと思ったからです。

今、日本では犯罪や殺人事件が多発するという信じられないことになっています。そんな中、日本を少しでも平和に戻すためにも、この合宿で出来た友だちと交流しながら努めていきたいと思いました。一人一人が出来ることをすればいいのだと思います。絆を深めたり、色々な人と交流して苦楽を共にすることが、こうした出来事を減らす対策だと思っています。ここに来て、日本はまだ終わつたわけじゃない、勝手に終わりとは決めてはいけないうことを実感しました。未熟な自分ではありますがとうございました。

行く時は右も左も知らぬ人帰る時には友達となる

カメラ・レポート1



全国から集り来た参加者は、それぞれの思ひを胸に、受付を済ませ速やかに開会式に臨んだ。

「我が国が世界最古の国家」という言葉が心に残った

今年で二回目の合宿教室の参加になりました。
(福岡大学 経 四年 大山憲哉)

合宿全体を通して、最初に私は自分が知らなかった日本のことを一つでも得て帰ろうという目標を掲げました。特に講義では自らが解らなかつたことを洗い出し、班別研修でその疑問点を解決しようとしました。特に、竹田恒泰先生の講義で「我が国が世界最古の国家」という言葉が印象に残っています。日本の歴史は長いということは知っていましたが、世界最古の国家であることは知らず、新たな発見となりました。一回一回の講義、班別研修、グループ活動を通して、切磋琢磨しあう仲間たちと出会えたことが今回の合宿の大きな収穫ではないかと思えます。グループの皆さん、本当にありがとうございました。

短歌の相互批評で班付の折田豊生さんから「お手本を学ぶことが大事」と言はれて

お手本が大事との教へ明日からの我に活かすべしと切に思へり

命を賭けて行く人生の大事業を見つけない

(慶応義塾大学 院 二年 杠 泰介)

今回の合宿全体を通し、ある思いが生まれました。それは、命を賭けてでも行う人生の大事業を見つけない、という思い

です。西郷隆盛についてのご講義の中で「死処」という言葉がありました。この言葉がこの合宿で一番心に残りました。

ただ漫然と深い情熱もなく無味乾燥な人生を生きたくはありません。弟子に向けた吉田松陰の言葉に「百年の時は一瞬にすぎない。君たちはどうか素餐するなかれ」があります。

私は現在二六才ですが、呑気に時を過ごしているうちにあつという間に人生は終わってしまうと思うようになりました。日本建国以来の永い歴史をみれば一人の人間の一生など本当に「一瞬」です。これこそは、というものを見つけ、一度限りの人生を全うしたいと思えます。

国文研合宿を終えて

くたくたに疲れて顎を出したるが心に満ちたる勇気を感じず

他国にはない誇るべき日本を知ることができた

(九州工業大学 院 二年 小林達郎)

一年前の江田島では、合宿を終えた時、政治や時事への興味が先行する余り、偉人や著者の思いに迫り、和歌を詠み、自分自身を磨くことを怠り、そこに気付くまでに多くの時間を使ってしまったことを悔やみました。今回の合宿では、そうならないよう意識して臨みました。

今回の合宿では、多くの御製や和歌を読み「しきしまの道」に心を通わせ、稚拙ながらも素直な心で和歌創作に取り組みました。また、日本の歴史の長さや「和」の精神による国家

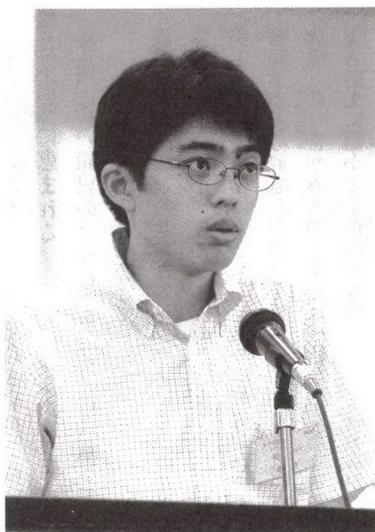
統合など他国にはない誇るべき日本を知ることが出来ました。同時に、伝統の継承途絶の危機や私たちの世代へと遠からず託される文化伝承の責任を重く感じました。新たな仲間との出会いを大切にしつつ今後も学んで参ります。誇りある歴史に触れて皇国を護らんとする心育む

父祖の歴史に取り組みたい

(北濱 道 50歳)

「国民」は、歴史、神話を共有する、といふ竹田恒泰先生の言葉を思ひ返してゐる。開会式で廣木寧合宿運営委員長が、「歴史を旅して下さい」と仰った。そしてこの合宿期間中私達はそれに取り組んだ。合宿参加者で先づ父祖の歴史を共有せむと取り組んだ。そこで私たちは、単に歴史事実を知ることとどまらず、自己のありやうを見つめるやうに促された。そしてそれはやがて、私たちの間に親密さを齎した。私達は「国民」といふ感覚を経験したのである。合宿教室での研修は合宿終了を以て終るが、私たちの父祖の歴史は、合宿終了を以てもどこにも行きはせず、私達の眼前にある。本合宿で出会った人らと、それに取り組んでいきたい。父祖達の歩み来りし跡跡を心を籠めて辿らむと思ふ

カメラ・レポート2



合宿教室は九州工業大学四年 脇勇貴君（右）の開会宣言で幕を開けた。次いで東京大学四年の高木悠君（左）は「講師の言葉、班員の言葉に耳を傾け理解するやうに努めたことは自分の力になった。他者の話を正確に聞くやうに努めて、心が通ふと自分の心の躍動を覚える。思ひを共有する喜びを感じる合宿にして行きませう」と訴へた。

「歴史の旅」を続けてゆきたい

(大阪湾広域臨海環境整備センター 久米秀俊 55歳)

二十六年ぶりの合宿参加だった。竹田恒泰先生のご講義では、二千年以上続いてゐる国家は世界中探してもどこにもないこと、自己の主体性を保ちながら他者と協調できることが「和」であり、出雲をはじめとした各地の豪族を三世紀ころに国として統一するにあたってこの「和」の精神が発揮されたことなどの説得力のあるお話に目から鱗が落ちるやうだった。

また、小柳志乃夫さんのお話では、明治天皇、昭和天皇の御巡幸の際、当時のその地の人たちがどの様に陛下をお迎へしたかを、当時の文献を具体的に示されるのをお聴きし、農業を営む人、教育に携はる人たちなど多くの人たちが、新たな力を得てその後の人生の糧とされたことがよくわかった。山を下りた後も、心新たに「歴史の旅」を続けてゆきたい。

閉会式での廣木寧運宮委員長の御挨拶をお聴きして

合宿中「歴史の旅」を続けこしと語らるる言葉を肯なひて聴く
山下りでも心新たに我が国の「歴史の旅」を続けゆきたし

若い諸兄のフォローアップに貢献したい

合宿が無事に終了し、安堵してゐる。
(熊本市役所 折田豊生 61歳)

参加者勧誘にも合宿運営にも何ら貢献できず、恐縮しながら合宿を過ごしたが、全体感想自由発表を聴いてみると、希望と幸福感に恵まれる。

今後、若い諸兄のフォローアップに貢献して参りたい。

白濱裕兄の御講義を聴きて

我が友が揃へ給ひし数多なるレジュメに思ひの深さ知らるる降ちゆく世に正すべきこととのさはなるを思ふ友の講義に美しき国の姿を学ばんと示し給へり「教育勸語」を

悟陰翁がみ心砕きしその文を言葉尽くして友は説きゆく
大君と后きさいのみや 宮がみちのくを訪はせ給ひしくだり胸衝く

よき話更に聴かまく思へども時ぞ迫りて終ふるが口惜し

第二班—男子学生—

日本語の真の魅力に気付いた

(九州大学 文 一年 中村允紀)

今回初めて参加させていただき、私が当たり前のように過ごしてきたこの「日本」という国の精神に触れ、その魅力に、素晴らしさに心うたれていきます。「コトノハ」の持つ力(日本では古来これを言霊と呼んできました)を感じ、私が毎日、言葉をいかに軽んじて使っていたか、今とても反省しています。ただのコミュニケーションツールとしての言語ではない

「日本語」の真の魅力に気付き、そしてそれに取りつかれたかのような心持ちです。今はまだ拙く未熟ではありますが、この素晴らしき伝統を、いや武器を、磨きながら、真の日本人になれるように精進していく所存であります。充実した実りある日々と貴重なかけがえのない友どち、そしてそれらすべてを与えてくださった皆々様、ありがとうございます。

合宿を終へて

けふ私の眼に見ゆる日の丸の紅と白とのあざやかさはも

閉会式にて

日本人の生くべき姿見せり真の学びを得し今なれば

「知る」ということの真の姿を見た

(大阪大学 経 三年 岩井中 健)

私はこの合宿教室で初めて日本のこと、天皇陛下のことを考える機会を得ました。先生方のお話や班別研修での班員や班長のお話は頭では理解できても、何かだまされているような気がして共感することは出来ませんでした。班別研修での疑問をぶつけてみたところ、「その疑問を忘れないでほしい。そうすれば必ずと今度は自分の目で見て耳で聞いて、主体的に学ぶ意欲が湧いてくるはずだ。御声や御歌を味わい、時には実際に天皇陛下のお姿を見てみる。その中で必ず自分の心が動く瞬間があるはずだ。実感や感動を伴った時、はじめて君は本当の意味で日本のこと、天皇陛下のことを理解し、共



カメラ・レポート3

主催者を代表して上村和男理事長は「道を間違へたと気づいたら元へ戻るのが登山の鉄則である。今こそ学問の道筋を正すため、自分の国をしっかりと見つめる学問を始めなければならない。領土が侵されやうとしてゐる時に傍観してゐては日本が日本でなくなる。この合宿を学問の原点に戻って考へ直す切っ掛けにして欲しい」と述べた。

感するのだ。」というお言葉をいただきました。ここで私は「知る」ということの真の姿を見たと思います。

良き友と出会へし阿蘇の大地へと大きく育ちてまた帰り来む

自分の生き方がそのまま日本思想になり得る

（東京大学 理 四年 高木 悠）

奥富修一先生が御講義の中で、昭和四十六年の合宿運営委員長の檄文から「諸君が生き生きとした人生体験をつみ重ねていけば、それがそのまま日本思想である」といふ言葉を紹介された。それまでは、皇室と國民の心の交流に感動したり、日本は世界最古の國であるといふ言葉に励まされたりしてきたが、自分の生き方が直接日本思想になり得るなど考へもしなかつた。小柳志乃夫先生が御講義で紹介された、

ありがたきみゆきをろがみ立ち歸り稲を作りて御世につかへむ

と詠んだ栃木県の農民は、自らの仕事に誇りを持ち、生き生きと生き、確かに日本に連なっていたのだと切実に感じた。

物を考へるヒント、生きる事に対する勇氣を得たやうに思ふ。

我々の生き生きとした人生の体験そのまま日本思想と

稲作り御世に仕ふと歌ひたる農夫の言葉の力強しも

日本を知らなかつたといふことを強く自覚した

（九州工業大学 情報工 四年 脇 勇貴）

今回の合宿研修は私にとって初の参加であった。御講義の内容もさることながら、積極的姿勢を崩さぬ班員達に大きな刺激を受けた。最も大きな収穫は自分の無知を自覚したことである。私が思つてゐた以上に、私は日本を知らなかつたといふことを強く自覚した。そして今後知つていかう、学んでいかうとする、前向きな気持ちを持たつたと思ふ。特に古事記と万葉集は出来る範囲で取り組みたいと考へる。自己表現が苦手で古語の知識がほとんど無い私には、短歌は気が重いものであつたが、積極的に批評に加はり助言することもためらはない班員に背中を押され自分なりの表現をすることができた。この合宿で得た知識、経験、友人らは極めて貴重な財産である。持ち腐れにならないやう、今後研鑽に励みたい。

合宿教室の折に

自らの無知を知り得て明日からの学びの日々を勇み歩まむ

自分に引きつけた学びが大事であると感じた

（明治大学 法 四年 岡部 亮寛）

僕は合宿最終日の講義の「日本思想や歴史を考える時にまず客観的に見ようというのか。」という言葉にはつとせせられました。今まで自分の中で、客観的に物事を見て、分析・判断することに価値を置いてきました。勉強に対してどこか他人事で、緊迫感、切実感がなく、勉強の意味というのが見出せていなかったことも多かつたと感じています。この合宿

では、常に自分の意見を求められます。他人の考え方をあれこれとあげつらうだけで自らの意見を持つとしないことは逃げの姿勢であると気づかされました。

理論ももちろん大事ですが、講義で学んだ「魂で感じる感覚を大事にし、それを理解し、自らの言葉で伝えようとする」という自分に引きつけた学びが大事であると感じました。

出でたるガスに行く手を阻まれて阿蘇の火口を見るは叶はず
師や友や阿蘇の自然に囲まれて己が小ささ思ひ知りけり
いつかまた阿蘇の地に来む自らに引きつけ学ぶ研鑽積みて

心が動くだけで何もしなければ意味は無い

(福岡大学 経 四年 山野成範)

自分はほんの数年前まで目標も目的も夢もなく生活していた。日本の文化についての関心もなければ誇りもなく、歴史も知らなかった。そんな中、沖繩に旅行に行き、戦跡や史料館を見学した時、私は初めて「今の日本は先人が守り、築き上げてきたものなのだ」と感じた。知覧の特攻記念館へ行った時、「日本人という民族はなんて勇猛なのだ」と感じた。

そんな日本。強い日本。礼儀正しく、人の気持ちを考え行動するような美しい日本。その日本が今とんどん消えかかっている。誰かが継承し、伝えていかなければならない。表面上だけで「伝えていきます、頑張ります」というのは簡単だ。次の世代、そのまた次の世代へ継承されるかどうかは私達に



開会式。全国から集った合宿参加者。

かかっている。必ず先人、国文研様の期待に応えてみせる。知るべきを知りて心は動けども何もせざれば意味なしと思ふ

歌は愛に満ちた贈り物だと知った

(一橋大学 院 一年 中村紘右)

初めて挑んだ短歌創作を通じて、三点の気づきを得ました。一点目は、歌を詠む難しさです。自らの言葉の乏しさを痛感させられ時間もかかりましたが、班員のおかげで歌が完成した時の喜びは阿蘇の雄大な青空に似た清々しいものでした。二点目は、班員の真剣な眼です。社会人経験のある私と十歳近い年の差のある彼らの短歌に取り組む眼は、私の曇ってしまった眼にも輝いて見えました。澄み切った眼が曇ることのない日本社会に戻さねばと思うに至りました。

三点目は、和歌の真の意味です。私は日本の伝統的な歌だから和歌だと安易に考えていました。しかし、歌は、先人からの縦糸と私たちの横糸の心を和する、愛に満ちた贈り物だと知りました。この愛を次世代に伝えていきたいと思ひます。先人と我らの思ひ縦糸と横糸になり織り成す和歌は

短歌相互批評で心通ひ合ふ時を過ごせた

(東洋紡績(株) 庭本秀一郎 37歳)

短歌相互批評の時間は特に充実したものと感じられました。

班員から色々なことを教はりましたし、何よりも自分が人の話をよく聴くといふことがまだまだ出来てゐないと反省させられることしきりでした。

熱意あふるる班員の皆さんと班付の山内健生先生、小野吉宣先生のお導きを得て、心の通ひ合ふ時をすごせたことを本当に有難く思ひ、今後もこの合宿のやうな交流を続けていきたいと思ひました。

心ばへは歌の細部に宿りしを気づかされけり君が言葉に

(岩井中健君)

物に感ずることのみなれば意味はなし行動せんこそ大事と言ひき

(山野成範君)

口数は少なけれども眼差しに友の心に迫らむとふ気満つ

(高木悠君)

先人との縦糸友との横糸を結ぶが和なりと君は言ひけり

(中村紘右君)

神職への意志固まれるまでの迷ひ直く静かに語れり君は

(岡部訓亮君)

空へ雲へ語れるごとく心向け生きてきぬらむ少年の君よ

(中村允紀君)

同胞と思ふ気持ちは感動を分かち合ひ得て生ると思ひき

(脇勇貴君の言葉に触発されて)

云はく言はれぬ親しみの湧く

(元 福岡県立直方高等学校教諭 小野吉宣 65歳)
和歌相互批評の折に

もくもくとわき立つ白雲見てをれば笑ひかけ来る雲あると聴く

刻々に変はる白雲見やりつつほほゑみかくるみ雲探しき

天上ゆ我等が学び見そなはし神々つどはれ喜び給ふや

延々と相互批評を続けをれば云はく言はれぬ親しみの湧く

汗をふき坐り直して添削を終へたる和歌を朗々誦み上ぐ

奥富修一氏の講義の折に

豊かなる心育む力持つ敷島の道知らせ給へり

「言の葉のまことと道」を怠らず踏み行く弾み今こゝで撞く

たまきはる命の通ひ路踏みわくる無限の喜び遠くにあらず

慰霊祭の折に

高原に注連縄張りて祭場はしつらへてあり霊気を感じる

皇国守る正気湧きくる祈り込め御霊を迎ふ式はしめやか

「ますらをの悲しき生命」を呼ばひたる和歌の朗詠霊まねくらむ

わたくしを払ひ遠ざけ新しく出会ふみ友と学ぶを誓ふ

感応相称のみづみづしい精神世界に生きたい

(拓殖大学日本文化研究所 客員教授 山内健生 67歳)

小柳志乃夫先生の御講義に出てきた「感応相称」について考へさせられた。それはみ仏の、尊きものの無限の尊さを感じ



合宿導入講義。『一度は考へておくべきこと』と題し、元熊本県立大津高等学校長・白濱裕先生は「教育再生のために、いま一度「教育勅語」の精神を見直すべきである」として、起草の経緯や起草に当たった井上毅の努力の跡を迎えられた後、東日本大震災で「義勇公に奉じた」人々の中に、教育勅語の精神は今に生きてゐると語られた。

じた時の心ふるへる体験をさすものと思ふが、御製に心がふるへるなら、まさに感応相称の世界であると実感した。

さらに現代の若者が先人の歌や言葉に感じる一瞬をもち、自他が心を通はせ合ひ、他者の歌を読んでその心持ちがわかることも「感応相称」といっていい。

日本人の歴史の真実・真相を示す言葉が感応相称の世界であると痛感した。感応相称の言葉が一人歩きしてイデオロギー化してはならないが、感応相称のみづみづしい精神世界に生きたいのとあらためて痛感した次第である。

日本人とは何かを胸の中から感じ考へさせられた合宿であつた。

班別短歌相互批評

くさぐさの思ひを一首にこめんとするひたむきな姿を尊く思ひぬ
歌としてはまづくはあれども若きらのひたむきな思ひの尊しと思
ふ

それぞれに思ひ抱きて進みゆく若き友らを羨しと思ひぬ
ものごとに大いに關心示しつつひたむきに生きよ若き友らよ

第三班—男子学生—

真剣にこの国を見つめ直すことができた

(細田学園高等学校 二年 嶋田裕一)

僕は今回初めてこの合宿に参加しました。

最初はものすごく不安でしやうがなかつたのですが班の人たちが非常に温かく優しくして下さいます。非常に良い合宿になったと思います。レクレーションでは阿蘇山火口を見た直後にガス濃度が高くなり緊急事態となりました。その緊急事態で同じ班の先輩方の背中が頼もしく思えて、それで不安な気持ちが一掃されました。慰霊祭は初めてのことで分らないことばかりでしたが、厳かに荘重に祭りが行われて戦死者の御霊が慰められた気がします。講義では日本の戦後教育の問題などについて、古事記や短歌について、日本人の心について学ぶことができ、真剣にこの国を見つめ直すことができました。ありがとうございます。先輩がたに様々な刺激を受けたので、来年また変わった姿をみせたいと思います。阿蘇の地で出会ひし先輩と学び舎と別れることは名残惜しきかな

学んだことを生かしていきたい

(長崎大学 教 一年 富本伊織)

今回私は初めてこの合宿に参加しました。参加したきっかけは父が学生のころに参加していたらしく、日本の勉強になるので行ってこいと言われたからで、とても不安でした。しかし実際に講義を受けてみると、とても勉強になり良い経験となりました。私は教育学部で将来は学校の先生になりたいので、今回学んだこと、これから学ぶことを教鞭に生か

し、日本の未来を作る小学生を育てていこうと思います。ありがとうございました。

班友と仲良くなりける合宿も終れば寂しく悲しかりけり

本をもっと読もうと思った

(追手門学院大学 社会 一年 絹田 暁)

私はこの合宿に参加するのは初めてで、古典や歴史などが苦手なので話についていけないかどうかとても不安でした。父がこの合宿によく参加しているかどうかも不安でした。父がこんな感じかなという感じで参加したのですが、皆さんが私の知らない日本語をたくさん知っていて、私自身の世間の常識の知らなすぎにかなり焦りました。私にはこの合宿に参加するには少し早かったかなと思いました。私は小説などを讀んだ事が無いので、これからは本をもっと読もうと思いました。そしてもっと成長してからこの合宿にもう一度参加したいと思いました。

あたたかき先輩方に囲まれて日本の真価を心底思ひぬ

日本の文化の神髄へ迫ることが出来た

(立命館大学 文 一年 藤新朋大)

今、「本当に深い心を知る」といふ機会が失はれてゐると思ひます。皇室とは何か、天皇とは何かといった、非常に難

カメラ・レポート6



合宿2日目の朝の集ひにて。草原にて皆で唱歌を歌った。

しいテーマを皆が避け、あるいは表面的にのみ扱ふといふ者が多い中、この合宿に於いては「本当に深い次元で、皇室のこと、天皇のこと、そして我が国日本のことを学ぶ」といふ事ができました。

仲間たちと様々な「言葉」に触れ、また自分の心を「短歌」に映すことで、先人たちの伝へて来られた日本の文化の神髓へ迫ることが出来ました。本当に有難うございました。

感想を伝へんとする班友に心動かされ我も手を挙ぐ

合宿で得た二つの課題

(早稲田大学 商 一年 小柳誠志郎)

初めて合宿に参加し二つ特に思うことがあります。

一つは伝統文化と新興文化、それを担う私達現代の日本人についてです。講義の中でアメリカの学生の中に平家物語に詳しい人たちがいると聞き、とても自分を恥ずかしく思いました。日本の伝統文化の担い手は日本人であるべきなのに、当の自分は学校の教材程度でしか触れていないことが頭に浮かんだからです。合宿後の私の課題を見つけた気がします。

二つ目は人を尊敬することについてです。私のまわりに尊敬すべき人物がいます。しかし私は、その人とは次元というレベルの違う人間だと思ふにとどまっていたのです。尊敬すべき人の生き方を見習い、その人に近づこうとすること。それが本当の意味で尊敬することなのだと思ふかされたので

す。この合宿を通して得たこの二つのことを心に留めてこの後の勉強に努めていきたいと思っています。

阿蘇の野辺青く繁れる夏草は朝霧くぐりて露に濡れたり

素直な気持ちで短歌にのせることができた

(福岡大学 人文 二年 岩永 啓)

この合宿で自分の愚かさを知りました。三日目の夜、班付の先生から西郷隆盛の話と昔の日本の話を聞いて、自然と胸の中が熱くなり涙が出てきました。そして、日本そして日本に生きた偉人について、より知りたいと思いました。班員も良い仲間にも恵まれました。班長さん、班付の先生も自分の未熟な意見を拾って下さり、多くの知識を教えてくださいいただきました。本当に有意義な時間が過ごせました。自分の素直な気持ちを短歌にのせることもできました。五日間本当にありがとうございました。

合宿は色々失敗ありしかど出会いに感謝すべてに感謝

日本を知ること「自分」を知ること

(中央大学 文 三年 廣木摩理勢)

今年で三回目の参加となりましたが、一昨年よりも去年、去年よりも今年の方が深く学び、感じる事ができました。私はこの三回の合宿で学んだことは一つだと感じています。

それは「自分を知る」ということです。その大きなものが日本人としての「自分」、日本に生まれた「自分」です。この数回の合宿で、日本を知ることには「自分」を知るということだと心から思いました。そして私事ではありますが、血の繋がりのある身近な人のことを深く知ることができました。これも「自分を知る」ことに変わらないと思います。自分を知ることができたこと、別の言い方をすれば自分のアイデンティティーを見つけることができたこと。これが何よりありがたいことだと感じています。

三泊四日の合宿を終へて

我が気持ち初日と今は違ひけり今思ふのは己が行く末

これからも折に触れて短歌を詠みたい

(大阪大学 経 三年 青野 遼)

合宿が始まり講義の内容は非常に興味深く面白いものですが、いかんせん、勉強不足で班別研修では言葉の出ない歯がゆさを感じました。更に日程が厳しい中、班員ともコミュニケーションが十分にとれずなかなか息苦しい時間でした。

しかし三日目の班別短歌相互批評の時に、あれやこれやと語り合ううちに、短歌から人柄が見え、話はずみ、とても仲良くなりました。短歌の「心通ずる」力を感じさせられました。願わくはもっと早い段階で和歌を詠ませてほしかったということです。そして、これからも折に触れて短歌を詠み

カメラ・レポート7



『日本はなぜ世界で一番人気があるのかー日本の歴史と皇室のありがたさー』と題して作家・慶應義塾大学講師の竹田恒泰先生は、「我国の主権は天皇お一人にあるのでもなければ、国民一人一人にあるのでもない。天皇と国民が一体となった『君民一体』の姿こそがわが国の主権者の姿である」とお述べになった。

たいと思いました。

班別短歌相互批評にて

班友とあれやこれやと語らひて直してゆけば絆深まる

国の歴史の風景を味はへた

(株)HIEアロスペース 内海勝彦 57歳

開会式で廣木寧運営委員長が「自分の国の歴史の風景をよく味はって欲しい」と挨拶されたが、今回も様々な講義を通じて感じ取ることができ有難かった。特に改めて短歌の大切さを教へられた。「歌は豊かな心を育む力を持つ」「歌を詠むことで心豊かな生活を送ることが出来る」ことを胸に刻みたい。

また、小柳志乃夫先生のご講義の中で天皇と総理大臣の違いについて触れられ、総理大臣が国民の生活に係はるのに対して、天皇は私たちの人生にふれるもののご指摘は心に残った。天皇陛下は私たちの生きる意味合ひ、さらに生と死、それはすなはち悠久の昔から永遠に続いてゆく日本の国の歴史を感じさせて戴くご存在なのだと思へたのである。

閉会式での廣木寧運営委員長挨拶を聴きて

万葉ゆ今の世までを君達は旅したのだと先輩は語りぬ

日の本の長き歴史のゆたかさが君らの疲れの元と言はれし

君達の子や孫のため学べよと宣らす言葉に氣迫こもりぬ

第四班—男子学生—

短歌創作を通して達成感を感じた

(熊本大学 法 一年 石田 博)

私は今まで短歌というものにふれたことがありませんでしたが、天皇の御製に触れたり、自分の気持ちを五七五七七という短い言葉につめ込む難しさを経験する中で、素直に述べることの大切さを学びました。班別討論では班員の方々に自分の短歌を批評して頂きました。初めの短歌は「阿蘇の旅」と語らうバスの中知らぬ間に親友となる」というもので、これを先生や班のメンバーの方とまとめ直して「バスの中語らひはずみて知らぬ間に親友を得し心地するなり」となりました。今までに詠んだことのないよい短歌をよむことができて、今までの大学生活の中で久々に達成感というものを感じることもできました。これからも和歌の面白さにふれていきたいと思えます。

旅終へて歴史を感じし和の国の阿蘇去りし後も我は学ばむ

自分の知らなかったこと

(九州産業大学 経 二年 緒方雄樹)

私はこの合宿教室で想像以上に様々な有意義なことを学ぶ

ことができずました。竹田恒泰先生のお話では、日本が他のどの国にもない君民一体を主権とした国であり、また列島にかつてあつた小国が争うことなく話し合ひで結束していった国であること知らされ、とても意外なお話でそれが世界で一度も減びることなく今に至っている要因であるのかと感じました。班別研修では自分の誤りを指摘され、いかに自分が無知であつたか思い知らされたり、自分の知らなかつたことも知ることが出来、本当に良い経験となりました。

合宿所を去るにあたり、ここで得たものを忘れてしまつたり、単なる客観的知識としてしまわぬよう心に決めたい。ここで出会つた友とのつながりを今後も大切にしたいと思う。

竹田恒泰先生の話を聴きて

我が国の眞の歴史を知らぬとはなんとおろかかと我を恥ぢぬる

天皇陛下の国民を想ふ御心

(専修大学 法 三年 奈良崎 恵祐)

私はこの合宿に参加するたびに自分の勉学の至らなさを痛感すると同時に、歴代の天皇陛下の御製を読ませていただく中で、直接のお言葉を聞かずとも天皇陛下の国民を想ふ御心に触れることができてそれが私の心に強く響いてきます。そのことを日々の生活の中で常に私の心に留め、我々国民を常に見守つて下さる天皇皇后両陛下に感謝と尊敬の念を持つて、日本人として人生を歩んで行きたいと思ひます。

カメラ・レポート 8



竹田恒泰先生はご講義の後、班別研修にも顔を出され、学生らに真摯に向き合ひ話を聞いて下さつた。

今回の合宿も良き友人ら先生方に恵まれ、大変心地よい時間を過ごさせていただきました。班員たちとも数え切れない思い出を作り、先生方のご指導をいただき、非常に充実した四日間となつて、私の人生をより豊かにさせる経験になつたと確信しております。

旧友や新たな友と過ごす日も別れゆくのはさびしかりけり

天皇陛下に対する価値観が変わつた

(福岡大学 商 二年 田上 亮)

私はこの合宿で天皇陛下に対する価値観が一八〇度変わりました。以前までの私は、天皇の存在とは何か?なぜ同じ人間であるのに天皇陛下などと呼ばなければならないのかと考へていました。しかしこの合宿を通じて天皇陛下が国民を思う気持ちが誰よりも強いことを知りました。班別研修の時、小柳左門先生がお話してくださつた皇后陛下がハンセン病患者の方を訪問した時の話しが非常に印象に残っています。

この場で学んだ事を特別に経験したこととして忘れてしまわないよう努力すると共に、友人や両親に伝え、多くの人に天皇皇后両陛下の国民を思つて下さる気持ちというものは日本一であることを伝え、私も日本人であるという誇りを持つて生きていきたいと思ひます。

合宿を終へて

和の心を学びて思ふ先人のうるはしき姿に心洗はれしと

日本人としての自覚

(九州工業大学 情報工 三年 堀川祥平)

私は高校より工業系の道へ進み日本の文化・精神性について学ぶ機会を殆ど持たないまま過ごしていましたが、今回の合宿で御講義、班別討論を通してようやく日本人としての自覚を持つて生きるのでと奮い立つ気持ちが起こりました。

また今回の講義、班別研修で度々天皇陛下という言葉が使われるのに最初抵抗感がありました。しかし三日目の研修の時、小柳左門先生から皇后陛下がご巡幸の中でハンセン病の方々へ手袋を外されて握手を交わされたという話を教えていただき、かつて自分が熊本の菊池館で味わつた無力感と照らし合せて痛く尊敬の念が生まれ、陛下と皆さんが呼ばれていた理由が理解できました。私もまたまことの心を持つて天皇陛下とお呼びできるこの心の変化をうれしく思ひます。

知らぬ地の見知らぬ人と語り合ひ心の地図の広がりにつけ
学びし日短かけれども班友らと過ごせし日々は忘れ難しも

好きな言葉

(福岡大学 経 三年 西脇悠平)

私は以前寺子屋モデルの山口秀範先生に講演していただいた時に

「好きな言葉は心を成長させる糧になるからいくらあつて

もいい。」ということを言われ何か良い言葉はないのかと探していたのですが、今回の合宿の中で見つけることができました。それは明治天皇の御製の「をりにふれたる」です。

むらぎもの心のかぎりつくしてむわが思ふことなりもならずも

まごころをこめてならひしわざのみは年を経れどもわすれざりけり

まごころをこめて伝えた伝統は時が経っても忘れられることとはないという内容に心打たれ、心からこの合宿に参加してよかったですと思いました。

新しき友との別れ惜しみつつ「またね」と言って胸を躍らす

学びを継続・発展させる

(國學院大學 院 一年 相澤 守)

今回の合宿教室では陛下が国民と共にあろうされる御姿を学んできました。しかし奥富修一先生が御講義で触れられたようにこれが「特別な体験」としてそれだけで済ませて良いのかと考えると、今後各地で行われるであろう勉強会に参加して今回の学びを継続・発展させていこうと思っています。

さらに陛下の本当の御姿を多くの国民の皆さんに伝えていかなければならないと感じています。現在の国民の多くは陛下が国民を我が子のように慈しみ、国民と苦楽を共にされようとしておられることを知りません。私はまだまだ勉強不足ではありますが、この現状を変えていく一助として自分なりに

カメラ・レポート9



短歌創作導入講義。祐誠高等学校教諭・小林国平先生は、学生時代にこの合宿教室で初めて短歌を詠み、短歌相互批評で班員と感動を共有した時の喜びの体験を述べた後、「カメラは景色を写すが、短歌はその時の気持ちに心に刻む作業である」と説明された。

一人でも多くの人達に陛下のお姿を伝え、皇室と国民のあるべき姿を取り戻していきたいと思ひます。皆の声をせて御製拝誦し陛下の御心偲びまつれり

感応相称の世界

(日本青年協議会 松岡篤志 42歳)

今回の合宿においては「感応相称」といふ言葉が深く心に残った。

国民のおくりむかへて行くところさびしさ知らぬ鄙の長みち

(明治天皇御製)

ありがたきみゆきをろがみ立帰り稲を作りて御世につかへむ

(見目豊次 栃木県 農)

わざはひをわすれてわれを出むかふる民の心をうれしとぞ思ふ

(昭和天皇御製 戦災地視察)

明治、昭和のご巡幸における天皇と民の感応相称の世界がかうして和歌に表現され、平成の御代に私達が共感できることのありがたさ、忝さをしみじみ思つた。

来たる十一月には、天皇后両陛下が、沖繩に行幸啓遊ばされる。ともしびで大御心にお応へ申しあげる「聖なる夜景」をよみがえらせ、感応相称の世界を沖繩にあらはして参りたい。

鹿兒島湾上の聖なる夜景

うす暗き甲板の上^へにただひとりすめらみことは御拳手したまふ

山々に篝火たきて岸辺にはちようちんの群果てしなくつづく
幼きもともしびがかかけてまめやかにすめらみことを送り奉りぬ

学生との研修

(日章工業(株)代表取締役 藤新成信 52歳)

班付きとして参加させて頂きました。学生と寢食を共にし班別の研修を過ごさせて頂いたことは誠に新鮮な感じがしました。

小柳志乃夫先生の「感応相称」をテーマとしたご講義は大変分り易くまた奥深い学問の入り口をお示しいただけたものと思ひます。今林賢郁先生の西郷隆盛のご講義も混沌の世にどう生きるべきかを考へる上で大変参考となつたと存じます。この度「日本の偉人一〇〇人」が発刊されましたことは、大変意味深いことと存じます。この本の普及を図ることも大切なことではないかと考へてをります。

三日間若き友らと学び合ひ語り合ひけり家族のごとくに
学生らの語る言葉に自らの足らざる様を教へられけり

若きらの底知れない力

(若築建設(株) 池松伸典 56歳)

学生班に入らせて頂きご講義を含め学生と共に研鑽をすることができてとても感謝してゐます。班別討論を行ふ中で

様々な感動を学生と共にすることができました。親子の年齢差ではありますが、若きらの底知れない力を感じながらそれを伸ばしていく僅かな一助となる様、今後交流を深めていきたいと思ひます。

合宿で得た感動も時間と共に薄れゆき、単なる客観的知識、単なる思ひ出となつてしまひがちであります。ともすれば消えようとするいのちを今回の合宿での経験を思ひ出すことで、互ひに励まし合つて共に豊かな生を送られる様にしたい。

阿蘇の地を離れゆくともどもに文交はしつゝ励みゆかなむ

第五班

男子学生

刺激的な班員との交流

(長崎国際大学 葉 一年 川田亮介)

今回合宿に初参加してみても日本のこと、天皇のことに関して無知であったことを恥じた。講義自体は確かに取り組み難い内容ではあったが、先生達の講義は分かりやすく、その後の班別研修は自分の意見をうまく相手に伝えるというのほできていない気がしたが、ちゃんと輪になって参加できた。

班友との意見交流はとても刺激的でした。班別研修では短歌相互批評が印象に残りました。皆の意見を出し合つて一人一人の歌を清書していく。班友との意見をかわして出た意見

カメラ・レポート10



短歌創作を兼ねた野外研修。阿蘇火口登山や草千里を散策した。火口では噴煙の濃度が上がったとのことで、急遽下山を命じられるといふハプニングもあった。

を取り入れた短歌は自分で書いたものよりも何倍もすごいものだと感じました。

これから自分で「日本」のことについて様々学ぶ際には、まず短歌や御製を見ていき、そこから何かすばらしいものを読みとっていきたい。

班別研修にて

班友と議論し合ひし四日間我が考へ深まりにけり

新しい考えを学んだ

(明星大学 情報 二年 岡松 優)

私は兄にすすめられ初めて合宿に参加しました。国文研の話は昔から兄に聞いており、すごいなと思ひ、それと同時に興味もありました。なので、今回の合宿は自分にとって、とても勉強になりました。日本について、天皇について先生方の講義を聞く中で、今まで自分が考えていたこととは違うことが多くて驚きました。そして、また班別で話し合いをする中でそれぞれの考えがあり、さらに深く学ぶことができたと思います。

今回初めて短歌を作りました。正直とても難しく、あまり上手くできませんでした。でも、自分で考えた短歌を班員と批評し合うことで、よりよいものになったと思います。今後合宿に参加することで、もっといろいろなことを学んでいきたいと思いました。

友たちと共に学びて過ごしたる時間を忘るることのなからむ

短歌を通じて気持ちを通わせたい

(折尾愛真短期大学 経 二年 古賀良希)

この合宿で知っているようで知らなかった日本の歴史や短歌の作り方がわかってよかったです。僕は少人数のグループで意見や感想をみんなに伝えたり、言ったりすることができて、もっと短歌を通じて自分の気持ちや相手の気持ちを理解したいと思いました。短歌で自分の思っていることを伝えられたら人として人生をもっと深いものになると思いました。合宿の終りにちがづき思ふには友と学ぶは楽しかりけり

本心を素直に語れた

(西南学院大学 人間科学 四年 川原優一)

私の所属する五班では皆が調和を持っており、初日から居心地の良い班であったのですが、班別研修では本心で語り合えていないような気持ちがありました。しかし、三日目の小柳志乃夫先生の素晴らしい講義によって、湧き上がったそれぞれの感想を述べ合い、自己の短所や他者のよい点を本心で述べ合うことができ、ここで班員の心的距離はグッと近付いたと思います。私は、これまで自己の感情に素直に反応しておらず、理論武装で周囲に自分をひた隠しにしていたと思

います。この日、自己の感情に素直に反応し、本心で語れたことは、人生にとって大きな一歩だと思えます。人生を豊かにするものに、『歴史を（に）学ぶこと』と『人との出会いとその後のつながり』があると考えていますが、合宿教室を終えて、来年に向けて、よき人生に向けて学び続けていきます。

八月十九日朝のつどひ後の高原での虫・鳥の声をききて
目をつむり日頃は聴こえぬ虫・鳥の生くる息吹を心で感ずる

先輩方の話を聞き自分の意見の偏りに気づいた

（福岡大学 経 四年 山下和成）

心の底から「この合宿に来てよかった」と言いたいです。班別にて輪読することによって各人の見識を深める事ができましたし、大先輩方のお話を聞くことによって自分の意見の偏りに気づき修正することができました。

また、講師で特に印象に残ったのが竹田恒泰先生でした。日本の皇室の偉大さや日本史の深さなどを面白くそしてテンポよく私たちに語りかけてくださって、日本史についても一度深く勉強し直そうと思わせられる講義でした。その他には、短歌をつくり、班別短歌相互批評を通すことで一つの短歌をつくりあげたことは、本当に新鮮な体験でありました。皆様本当にありがとうございました。

班友と短歌をつくりし部屋の中話はずみで笑顔こぼれり



古典講義。国民文化研究会副理事長・今林賢郁先生は『西郷隆盛「南洲翁遺訓」』と題し、西郷隆盛の器量の大きさ、圧倒的な存在感と人望に思ひを馳せられ「節義廉恥を失て、国を維持するの道決して有らず、西洋各国同然なり」といふ言葉を取り上げて、それが現在でも「国を維持する」ことに繋がると述べられた。

自分を見つめなおす良い機会だった

(福岡大学 工 四年 廣木文屋)

私は今回で二回目の合宿になります。私は正直あまり合宿に行く意欲はありませんでした。仕事両立などの理由で体力的にも精神的にもきつかったからです。

合宿を終えた今素直に言って合宿に来てよかったと思いません。自分を見つめ直すいい機会だったと思います。改めて自分の気持ちに真剣に向き合う大切さを学びました。この気持ちを大切に日々の日常を全力で生きていきたいと思っています。

合宿終へさまざまな思ひありぬれど我は決意す心の成長

先人に真摯な態度で接すること

(東北大学 文 博士前期 一年 安江哲志)

客観性を求められる学問にとつて、愛国心や国民精神は邪魔な存在となるかもしれない。

そもそも客観とは何か。機械的に物事を対象化して冷やかな目で見える事だろうか。それもあるかもしれない。併し、歴史に於ける人物、その創作物は、決して物質的なものではない。みな我々の先人であり、我々と同じ生命である。先人の書いた書物に対して真摯な態度で接する事、これこそ先人を貴ぶ人間らしいあり方、人間としての客観的なあり方である。学問はこれら相対立する両概念をとにも背負わなければ

ならない。

我々は日本人として先人の残したたよりを手掛かりとして歴史を学ぶ。これは決して先人の前にただいたずらにひれ伏すという事ではない。感想とは言えぬかもしれないが、四日間日本という事を真摯に考えた結果の研究者としての私の心の内である。

吾が胸に二つの信心持ちたるは皇國の歴史と歴史科學ぞ

和歌の素晴らしさを学んだ

(株)ハウインターナショナル 谷口耕平 25歳

今回の合宿は和歌の素晴らしさといふものを非常に素直に分からせて頂けるものであったと思ひます。奥富修一先生が取り上げられた山上憶良の長歌の一部「皇神の厳しき国、言霊の幸はふ国」は天皇陛下が治められる、歌のさかんに詠まれる我が国の姿をうたつてであると教へて頂きました。和歌を詠み和歌によつて心をさっし合う日本の国體に加らむと学びの気持ちを新たにしました。

また、五班の皆様にも大変お世話になりました。班別研修を重ねるごとに、心からの言葉が現れてきて、とても良い学びの場となつたと感じます。ありがたうございました。

早々に短歌批評をやり終へて友らの顔ははれやかなりぬ

批評終へうまれし暇に気を休めゆるやかな時に話はずみぬ
はらからを得たかりけりと語ります君の言葉の誠なるかな

心の通ふ合宿だった

(日本ユニシス(株)北海道支店 大町憲明 57歳)

五班の十名の心がそのままに吐露され、本当に心の通ふといふことを感じた合宿でした。

又、御講義は、日本の国の良さを如何によく知るべきか、それが私たち自身の生きる力になり、国が滅ぶことなく引き継ぎ続けてゆけることになる。さういふことを改めて学んだ合宿でもありました。

班員の皆とは、今度は連絡し合へる仲間になったと思ひますので、通信(お便り)を続けて参りたく考へておます。さらには、札幌で待つ、札幌秋合宿仲間に、早々に本合宿の様子を伝える場を設けて、札幌での勉強会の復活に向かひたいと存じます。

最終日の朝の阿蘇山を拝し

み友らと青きみ空に大阿蘇の緑しるけく見仰ぐうれしき

青森の師の君(長内俊平先生)にこの友らとの朝の集ひを伝へゆ

きなむ

時がたつと班員の心も打ち解けていった

(宮崎県立都城商業高等学校校長 竹下鉄郎 58歳)

今回は五班の班長であった。七名の班員は、それぞれ現代的な学生ではあったが、皆等しく誠実な若者であった。時間



3日目の講義。『皇室と国民—感応相称の世界—』と題し、興銀リース(株)執行役員・小柳志乃夫先生は、孝明天皇の御製「澄ましえぬ水にわが身は沈むともにごしはせじなよろづ国民」を取り上げて、神への祈りと国民への思ひは一つであられたと話され、かうした国民への深い思ひは今上陛下にも受け継がれてゐると震災時の御製を解説された。

が過ぎるとともに、互ひの心もうちとけて行き、率直な意見がよく出る様になった。

合宿の内容としては白濱裕先生の導入講義から竹田恒泰先生、短歌導入講義、今林賢郁先生の古典講義、小柳志乃夫先生の「皇室と国民」、澤部壽孫先生の短歌相互批評、寶邊矢太郎先生の慰霊祭説明、最後の奥富修一先生「先人の言葉に学ぶ」まで一貫した流れで推移したと思ふ。

特に、短歌を中心とした心の迫り方、短歌の創作、「皇室」についての直入な深まりは、三泊四日の合宿を、とても充実したものにしたと思ふ。

最後の廣木寧運営委員長の挨拶は心に残った。有難うございました。

全体感想自由発表を聴いて

すめらぎの御歌に出合ひ涙せしと強きことばで友は語りぬ
次々と壇に登りし若きは心のたけを語り尽くせり

第十一班—女子—

印象に残った班別短歌相互批評

(アメリカンスクールインジャパン高等学校一年 スクイラチオティ茉莉菜)

二回目の合宿参加となりましたが、今回も大きく心が動かされ、様々な点にも気付かされました。特に印象に残ったの

のが、班別の短歌相互批評です。班員達が何を伝えたかったのかを考えながら、思いを表現する確かな言葉を探していくうちに、皆の心がぐっと近づくのを感じて、本当に短歌の力に感動しました。また、先生方のご講義をお聞きして、「私は日本の国民で本当に幸せだ」と感じました。

一方で、今の日本人の若者の多くがこんなにも素晴らしい歴史や文化を持っている国に対して誇りが持てない事に対して、悲しく悔しくなりました。

私はもう高校一年生になったというのに「これを絶対やりたい」という、はつきりした将来の夢がありませんでした。しかし、今日この合宿で感じた事をもとに、学校でまともな日本の歴史等を教えない現状をどうにかしたいという目標ができました。

班友とみ国を思ひ語らへば皆の心が一つになりゆく

充実した時間

(早稲田大学 政経 一年 岡田あかり)

今回の合宿に私は気軽な気持ちで参加したのですが、各御講義後の班別研修で先生方のお話をうかがうごとに、考えを深められたように思います。日本人としてこの世に生を受け、日本人として生きていくために知っておくべきことをこの合宿では学べたと思います。國武忠彦先生や小柳志乃夫先生の本当に貴重なお話を三泊四日の合宿教室で聞けたことは、今

後東京に帰った後も大いに活かしていきたいと考えています。短歌をこれほど専門的にかつ深く味わった経験がなかった私にとって充実した時間となりました。有り難う御座いました。

合宿に來たりて初めて短歌詠み日本の心を学びけるかな

合宿を終えた後が重要

(東京大学 文三 一年 山口実花)

合宿教室は充実したものでした。大学に入学してどのような勉強をすれば良いのか模索中だった私にとって大きな刺激となりました。日本の戦後教育や天皇陛下について今回の合宿で考えが深まり、日本の文化・歴史・古典など様々なことを学ぶ意欲が湧きました。そして日本人としての誇りがより一層高まりました。班別討論で班員や先生方と様々な意見を交換し合い、議論できたことは新鮮でした。大学ではまだ日本の諸問題について自らの意見をぶつけ合う機会がないので、今回討論し合えたことは今後の大学生活にも影響を与えたいと思います。

重要なことはこの合宿を終えた後です。東京に戻り従来の生活が始まります。今後古事記や日本の神話、天皇陛下の御製、日本の歴史・文化・唱歌などを学び、勉強会にも可能な限り参加していきたいと思います。学生という身分を存分に生かして少しでも立派な日本人になれるよう精進します(そしてこれが口だけで終わるビッグマウスにならないよう気を



会員発表。福岡労働局総務部・古川広治氏は、学んでゐることが現実の生活に活かされてゐるのか、何のために学んでゐるのか、時折不安に思ふことがあるが、『戦後世代からの発言—真正なる日本人を目指して—』（国文研叢書No.28・29）について取り上げ「人生とは何なのか」を問ふ学問があることを知った喜びを語った。

つけます)。

人生の先輩方の歌に触れ我もこれから詠みたしと思ふ

御製読み君と民とが信じ合ふ日本の姿改めて見ゆ

仲間と出会えた

(宮尾八幡宮・宇部市役所 河本上枝 22歳)

今度初めてこの合宿に参加して、私は日本について、また天皇の存在や日本の歴史について深く考える機会を頂きました。心に残っているお話は竹田恒泰先生の話された「君民一体」という言葉です。この日本の国の姿がルソーも望んでいた国の理想の姿なんだと知った時、日本に生まれたことを誇りに思いました。

そして何よりこの合宿で寝食を共にした班友(仲間)と出会えたことです。全国から同じ志を持った者が集まり、自分が抱えている日本についての意見を述べるという時間は、非常に刺激になりました。この熱い気持ちをつまでも持ち続ける為にも、そして勉強したことを多くの人に正しく伝えられる為にも、もっと本を読み、更に勉強しようと思います。学生のうちに参加できなかったことを残念に思います。

「また会はう!!」友と誓ひし再会の言葉を胸に山を下りゆく

学問の乏しき我に先生は優しき笑顔で励ましたまふ

しきしまの道を深めたい

(日本青年協議会 三萩 祥 28歳)

今回の合宿に参加して短歌の良さを改めて実感した。川出麻須美さんや明治天皇の御巡幸を仰いだ人々の歌等に触れ、何度も涙がこみあげてきた。

また野外散策で詠まれた歌も、良いなあと思うものがたくさんあった。特に連作で詠まれた歌は、時間の経過と共に変わる心や状況がとてつもなく伝わってくるもので、私もそのような短歌を詠みたいと強く思った。

歴代天皇の御製を仰ぎつつ、しきしまの道を深めていきたい。

歴代の天皇陛下の大御歌を仰ぎしきしまの道を歩まむ

気合を入れられた

(興銀リース株 小柳志乃夫 56歳)

國武忠彦先生と女子学生を担当したが、皆意識も高く、和やかな雰囲気でも過ごせたことをありがたく思ふ。今後とも付き合ひを続けたい。

廣木寧運宮委員長の全体指導は見事だった。開会式・閉会式の挨拶、特に日本の歴史を後世に伝えてゆくべき責務の話は気合を入れられた感じがする。

ここ数か月は講義準備で悩んでゐたが、無事終って正直

ホツとしてゐる。心新たに秋からの活動に努めていきたい。

朝の集ひにて

思はずも涙こみあぐ「故郷」の小学唱歌うたひてあれば

第十二班―女子―

去年の友と再会し同じ思ひを語り合へた

(スクイラチォテイのり子 49歳)

今年で二度目の合宿参加となります。近代日本の歴史を感じさせてくれた昨年の江田島同様、雄大な阿蘇に抱かれた、恵まれた環境の中で、充実した四日間を過ごさせていただきました。

去年初めてお会いした方々と再開し、同じ思いを語り合う時間を再び持てたことは本当にありがたいことでした。祖国の現状と行く末に同様の危機感、焦燥感を感じている人々に、こんなに沢山会えるのは、実に貴重なことです。

今年も講義、班別研修で沢山の知らなかったことを教えていただきました。

ありがとうございます。

合宿にて友と再会し

去年会へる友とふたたび語らへば昨日のつづきを語る心地す

カメラ・レポート 14



会員発表。日本ユニシス(株)北海道支店・大町憲朗氏は、初参加の合宿教室で天皇陛下のことが解らず「国に命を捧げる」といふことが理解できないまま合宿を終へ、その後の合宿で「御製を百回読みなさい。君は理屈だけで物を考へてゐる」と一喝されて目が醒める思ひで御製を読んだことが転機となったと思ひ出を語った。

「短歌は日本の国柄を表す」

(小迫知津子 58歳)

私は五十も半ばを過ぎあと二年もしないうちに還暦を迎えます。この年頃になり最近よく思うことは自分の人生を生きるということではなく、次の世代を生きる子供たちに何を残していくか、何を語り伝えていくかということです。その「何を」を模索している時、ふと出会ったのがこの合宿でした。

この四日間、先生方、皆様と勉強させて頂いて本当に良かったと有難く感謝致しております。今の気持ちを表すならば、かねてほんやりとしか見えなかった光がこの四日間を通じて一日一日と大きくはつきりとしたものになり、自分を照らしている、そんな表現になりますでしょうか。

日本人として生まれて半世紀以上も生きていながら、日本という国はどういう国なのか？日本人とは？といった問いかけにも満足に答えられず誇りすら持てないままでした。今回、先生方の講義、特に短歌の重要性、それ以上に短歌と日本との深い関わりを知って本当に美しいものとは何か、ということを知り、感動いたしました。「短歌は日本の国柄を表す」という言葉が耳に残ります。「和歌は『真言』を原理とする」を忘れることなく、今から少しずつ、楽しみながら勉強していきたいと思っています。まだこの世に存在すらしていない孫達に少しでも多くこの美しい日本を語り伝えられることを願って。

願って。

この国に生まれし縁の有難さ還暦前にしみじみ覚ゆ

短歌のすごさ

(華泉書道会 坂本和代 62歳)

今回は短歌のすごさを知りました。魂のこもった歌は何十年、何百年経っても人の心を動かすものすごい力があることを知りました。ただ聞いているだけで涙がとまりません。この感動を娑婆世界へ戻ってどう維持し、どのように伝えるかが私にかせられた課題だと思っています。

還暦を過ぎたこれからの人生を豊かに暮らすには、縁ある人たちの人生も豊かになるよう応援していきます。心の糧、魂の糧は日本人である誇りと自信と感じました。

自分の生活の糧である書道を生かし、歴史や偉人の話を読み聞かせたり、短歌をしつかり勉強して言葉の美しさ、慈愛、情緒を伝え育てたいと思っています。

憎き人も愛しき人もすべてみないだきはげます阿蘇の山々

お声かけを嬉しく感じた

(難波江 紀子 77歳)

今年明治天皇様崩御後百年の年ではありますが、その年に竹田恒泰先生の(明治天皇様の玄孫であります)ご講話を

拝聴できませんでしたことは大変に意義あり、又、竹田先生の巾広くあちこちをめぐられての上での如何に日本は世界ですばらしい国柄であるかをよく説いて下さいました。今後、若い世代に伝えることを考えて参りたく、と思いました。(竹田先生のおはなしを。)

白濱裕先生の初めの御講義、まことに今日本は周辺の国々(中国・ロシア・韓国)から侮られ続けておりますことをおはなし下され溜飲を下げる思いでございました。

又、小柳志乃夫先生の『皇室と国民』のレジメの中で『感応相称』という言葉や加納祐五先生のご存在あること、ご著書も含めて私は今回初めて存じ上げました。又、留萌沖三船遭難三十周年追悼会のことにもおふれ下され私の亡父青森県むつ市の出身でございますが、むつ市の郷土史家、『飛内進様』が平成十八年『うたり』郷土誌にこの留萌三船遭難事件のことを詳細かいておられます。早速に飛内様にこの会あることもお知らせしたく思いました。

一日目の夕食後、男子班第二十三班の嵐隆将様が突然お声をかけて下され、昨年江田島での会で私が産経のこと、歌のこと意見発表したことを忘れぬと申して下され今回に参加したことをあらためて認識致しました。嬉しく思いました。

嵐隆将様よりのお声かけを嬉しく感じて

ここ阿蘇に若人一人声かけし昨夏のよびかけ忘れずといひ



短歌全体批評。国民文化研究会副理事長・澤部壽孫先生は、参加者全員から提出された短歌をもとに全体批評を行はれた。時には笑ひ声もおきる中、短歌は正確な表現に直されることで、作者の思ひが伝はる歌に変貌していくと述べられ、「豊かな心が経験を豊かにする。短歌創作は豊かな心を育む上で大きな力を持ってゐる」と結ばれた。

直接お話しが聞けて本当によかった

(高知市立旭中学校教諭 岡つぐみ 40歳)

あつという間の三泊四日でした。一番楽しみにしてゐたのは竹田恒泰先生の講義でした。明るくわかりやすく、面白い講義に著書をよむだけではわからなかった祈りや願ひ、日本の国を思ふ情熱を感じ、直接お話しが聞けて本当によかったと思ひました。

十数年ぶりに参加した合宿で本当に久しぶりに和歌を詠みました。先生方の講義を聴くうちに、学生時代の合宿での感動がよみがへるとともに改めて、私が教育の道を選んだ原点に還ることができました。

日本の国の美しさや国のありかたを学ぶことができた私は本当に幸せだと感じてゐます。一番最初にこの合宿に導いてくれるきっかけになった祖父母は一昨年、昨年とつづけて天国に召されました。教育の現場で日々悩む私のために、二人が与へて下さった最高の機会であつたと今心から感謝してゐます。

先生方の講義からこれからの生き方あり方への切実な示唆を与へて頂きました。先づは力を頂きました。そして正しい事をそのまま感じたままに伝えていく一教師として、そして母としての、これからの自分を支へてくれる合宿になると思つてゐます。

しきしまの道とはうたをよむことを心の鏡とする道といふ

失はれし多くのものをとりもどす作業こそ和歌の道と師はいふ

子供の人格形成の鍵は母親にある

(駒交通事故総合分析センター 小田村 初男 62歳)

今回の合宿教室は我が国が天皇陛下、更には皇室を中心として、君民一体となり、伝統と文化を承け継ぎ、連続として続いて来たことを、一本の筋として構成され、特にそれが皇室と国民の「感応相称の世界」であること、また、しきしまの道である和歌に表現されていること、これから先、次代の国民に引き継いでいく為にも、我々に実践力が求められていること等が実例を以つて示され、有意義且つ感動的なものであつた。

また、同じ班の仲間にも恵まれ、その豊富な人生経験と高い志に基いた話に啓発されることが多かつた。

特に、偉人の母親は皆立派な人であつたとの指摘があり、教職等を通じて子供達と接している方々からは、その体験から、子供の人格形成の鍵は母親にあることが語られ、日本の文化と伝統を次代に繋げていく為には、世の母親の覚醒が重要であるとの話には、改めて感ずるところがあつた。

皇國の命受け継ぎて伝へゆく要は母なりと口々に語りぬ

国柄の尊さ

(元 小田原市立矢作小学校校長 岩越豊雄 68歳)

改めて天皇を頂く国柄の尊さ有難さを知った。いつも思ふことだが、合宿の講義は事前に打合せたわけではないのに、一貫するものがある。

日本の歴史伝統を否定し、日本人としての誇りを失はせた教育の問題点、竹田恒泰先生は君民一体の国柄とその伝統は世界的にも希有であること。又、小柳志乃夫さんはその具体的な世界―君民の感応相称の世界のお話であった。特にご巡幸における民の歌には、本来の日本の国柄の表れとして大変感銘を受けた。

その中核を成すのが、しきしまの歌であることを奥富修一さんの話でしめくった。

ただ一つ付け足すと、明治天皇の御製

たかねにはのほりえずとも言の葉のまことのみちをたえずたどらむ

とあるやうに、格調は高くなくとも、駄作でもよいから、ともかく歌を作ることの大切さを改めて思った。

阿蘇の山の朝空はれて皆ともに日の丸あふぐことのすがしさ

国柄の弥栄祈り思ひこめ声たからかに君が代歌ふ

カメラ・レポート 16



慰霊祭に先立ち、山口県立熊毛南高等学校教諭・寶邊矢太郎先生が慰霊祭について説明をされた。「この慰霊祭は、祖国日本のために尊い命を捧げられた全ての祖先のみ霊をお慰め申し上げる」ものであると説かれ、参列の際の作法（低頭、最敬礼、二拝二拍手一拝）を示された。祭儀で奉唱する『海ゆかば』の練習も行った。

合宿を自分の日常にしていけるやう努力したい

(東京工業大学 院 二年 安藤和則)

日本の古典の講義を真剣に聴き、班員と講義の内容を確認し、感じたこと思ふことを率直に述べあふこの合宿は明治維新の志士たちを育てた松下村塾とまでは行かずとも、現代の日常生活に比べれば、ずっと古き良き日本の心が残つてゐると感じます。

阿蘇に登り、雄大な牧草の風景に囲まれ、自然の豊かさを素直に感じながら友らと語らふことは本居官長が古事記を通して言つた、日本人が古来から大事にして来た自然な感情である「真心」に通ずると思ひます。ただ、このすばらしい合宿が私にとって非日常であるのは残念です。なぜなら、それだけ私の日常は、古き良き日本人の日常とはかけはなれてしまつてゐるのだらうと思ふからです。だからこそ私はこの合宿を自分の日常にしていけるやう努力して参りたいと思ひます。簡単なことではないと思ひますが、あがいて行くしかないと思ひます。貴重な経験に感謝します。

歴史書を繰り返し声に出して読む兄の知識は我が誇りなり

改めて驚かされる我が兄の皇国日本を想ふ心に

日本という国の素晴らしさを知ることができた

(株ハウインターナショナル 鬼洞裕一 26歳)

私は日本に産まれ日本で育ちましたが、私には「日本は産まれた国だから好きだ」程度の気持ちしかありませんでした。しかし、今回の合宿での講師の先生や班員の皆様のお話を聞き、日本という国の素晴らしさを知ることができました。私は元々無知な人間でしたが、日本が最古の国である事、和の心、和歌の素晴らしさ、西郷隆盛の精神、天皇陛下の偉大さ等多くの事を学ぶ事ができました。

しかし、これらの事は、学校では詳しく教えてくれません。戦争に負け、憲法や教育を変えられてしまつた事を悲しく思いました。私自信が日本について勉強し、身近な人たちに日本の素晴らしさを伝えなければならぬと感じました。

また、二十一班の皆様は勉強家であり、無知な私は劣等感を感じていました。しかし、班の皆様はこんな私に対しても平等に声をかけて下さつたので、気まずい思いをする事なく、楽しい四日間を過ごすことができました。

勤勉な班友達は優しくて無知なる我にも分け隔て無し

絆の有難さを再認識できました

前回に引き続き参加させて頂きましたが、前にも増して有

(安藤奏一朗 28歳)

意義なものにできませんでした。今回は、こちらに来る前と、来た直後は不安で仕方がありませんでした。しかし、同じ班となった方々、ひいては全体の参加者の皆様のご好意と、同行してくれている弟の親身のサポートのお陰で楽しく過し、また学ぶことができました。それにより、昨今では、失われていると言われる、絆や共同体のありがたさを再認識できました。短歌と言ふ日本独特の表現手段、天皇と言ふ人の身で「無私公正」を体現されている方の尊さが身にしみて分かりました。そして、日本についての勉強を今後も続けていこうと思えました。

阿蘇の地で学びし国の精髓を世に伝へむと想ひ新たに

今回は有難うございました

(株はせがわ 坂本博志 34歳)

今回の合宿で二つの事を感じました。一つ目は今まで自身「日本のこと」「天皇のこと」「文化のこと」に拒絶と無知であったことを恥ずかしく感じました。真実を伝えていない学校教育のおかげ(せい)で全く関心なくきました。合宿の参加において、様々な先生方の講義、班友の研修、短歌創作を体験し、まだまだ入り口ではありますが学ばせて頂きました。東京に戻り、仕事・プライベートにおいて、学んだことを実践して参ります。二つ目は、学んだことを、三人の子供達をはじめ、家族、友人、会社の人々へ伝えて行きたい



カメラ・レポート17

慰霊祭は、施設裏手の小高い草原に設へた祭壇の前に全員が整列。静寂の中、厳粛に執り行はれた。(株寺子屋モデル代表取締役・山口秀範氏の和歌朗詠の後、山の幸や海の幸が献進され、県立熊本高等学校教諭・久保田真氏が御製を拝誦、元新潟工科大学教授・大岡弘氏が祭文を奏上した。そして、一同で「海ゆかば」を奉唱した。

と感じました。日本人の誇り、正しい日本の歴史（歩み）、先人達の考え方、生き方など。しかし、まだ私自身勉強不足です。これから少しずつでも勉強を継続していきます。今回は、有難うございました。

合掌

寂しさを引きずりながら阿蘇離れ早く帰れと三人の息子

目標ができました

(柳九州建設弘済会 佐竹芳郎 63歳)

今回の合宿参加は初めての経験でしたが、大変得るものが多く有意義な毎日でした。参加の背景は、一つが日本の国力が衰退してきているが、これの対処をどうすればよいか。二つ目が生活に追われた毎日から残りの人生を悔いなく生きるにはどうしたらよいかを考えなかったです。この二つに対して合宿で大きなヒントと勇気を与えられました。一つ目に対しては、天皇を中心に心一つにして生きていく、日本の精神構造、伝統文化の素晴らしさに改めて気づかされました。和の精神、二千六百年以上続く世界最長の国家、和歌に見る日本人の崇高な精神性に誇りを持ってました。日本人が伝統的な日本文化を勉強し、身につけることによって誇りと自信を取り戻せば、日本国家の隆盛は今後も続くと思えます。この教育を取り戻す必要があります。二つ目についても、天皇陛下の無私で、国民を案じ続ける親のような崇高な精神、

西郷隆盛などの偉人の高い志と精神性を参考に、残りの人生を社会に奉公しながら生きて行く、生き様を見せたいと思う目標ができました。

のんびりと草はむ阿蘇牛をこかしこ思ふ存分幸をめでよ

世の中のお役に立つことができたと思います

(南米屋 安河内 順一 63歳)

この度は、国民文化研究会の全国学生青年合宿教室に参加させて頂き、誠にありがとうございます。

私は日頃天皇様と国民の関係について良く知りませんでした。この合宿において少しでも理解できればと臨んできました。

西郷隆盛翁の講義で、私を捨て公に生きられた方だと感じました。

天皇様におかれましては、無私の方と習い西郷隆盛翁にもはるかにまさる公の人だと理解することができました。

私も日頃の生活の中で公私のふんべつを持ち、世の中のお役に立つことができたと思います。

合宿のご縁に心より、感謝申し上げます。

合宿を過して余日早きかな学びし知識光り輝く

素晴らしいラインナップでした

(福島義榮 64歳)

今年で三回目、来年の厚木合宿にも是非参加したいです。

竹田恒泰先生を外部講師とする今回の三日間は天皇を中心にすえた素晴らしいラインナップでした。生活に人生を重ね合せた真心あふれる日々を送って参りたいと思ひました。

阿蘇の地にまことの人達集ひ来て敷島の道学ぶうれしき

西郷隆盛という偉人について私は何も知らなかつたと思つた

(SIS 株) 内田巖彦 66歳)

合宿が終つてほつとしてゐる。

何だか今までの合宿の中では一番疲れたやうな気がする。

それは社会人班の班長を勤めたことでずつと緊張が抜けなかつたからと思ふ。班の方々がどういふ姿勢で合宿に取り組まれ、講義内容を受け止められてゐるか、また、お互ひの話し合ひの中で深めていくか、役目の大きさを思へば、そのことが頭から離れなかつた。

班の方々は年齢も二十代の人から私を含む六十代と幅広く、職業も合宿参加の動機も様々で、合宿が始まる前はどうなることかと心配した。しかし、班の人達が真に明るく合宿への取り組み姿勢が真摯で文句のつけやうが無いもので、「今まで日本のことを知らなかつた」とか、多くの素直な意見を聞か

カメラ・レポート18



4日目。『先人の言葉に学ぶーしきしまの道についてー』と題し、元東急建設常務取締役・奥富修一先生は、万葉集の山上憶良が「皇神の厳しき国言霊の幸はふ国」(わが^か国は天皇様が統治されることにより永遠に栄へる国であり、和歌によって人の心の通ひあふ国である)と歌った国柄を紹介しつつ、和歌の原理は「まこと」にあると話された。

せて下さった。

素晴らしい講義が続いたが、合宿は何度参加しても自分の勉強不足を思ひ知らされる。同時に有り難さを感じる。それは講師や諸先輩の学問のお陰で今まで知らなかった古典にも触れ、日本の歴史についても新しい発見ができるからである。竹田恒泰先生の御講義と今林賢郁先生の御講義が特に印象に残った。

竹田先生は現代の憲法学会が抱える誤謬を明解に説かれただけでなく、古代日本の成り立ちについて触れられ、日本が世界的に見て、世界で最古の国であることを力説された。古代日本の姿は古事記の内容にそのまま通ずると思つた。

今林先生の西郷南州についての講義には目を開かれる思ひがした。明治維新を成就させた最大の功労者は、その偉人なるが故に明治政府に失望された。南州翁を慕ふ人の何と深く、多いことが改めて驚嘆した。そして西郷隆盛といふ偉人について私は何も知らなかつたと思つた。

日の本のことを案ずる友の思ひ聞き漏らさじと友の面見つめぬ
日の本の行く手危ふし祖先思ひ日々奮励し努力し行かむ

第二十二班 男子社会人

日本人としての「誇り」と「心」が心に刻まれた

(日商保険コンサルティング株 惣島 基 23歳)

私が、この合宿で深く心に刻んだことは、日本人としての「誇り」と「心」です。「和の国日本」「現存する最古の国家」「君民一体の国」これらを表す日本の歴史と先人の心に触れる和歌を通してこれまでにない日本人としての誇りと愛国心を感じました。

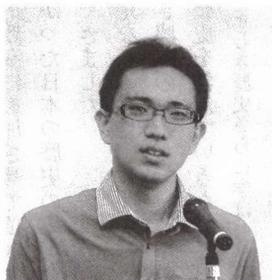
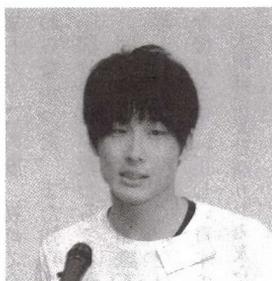
この合宿で学んだことをいかに伝えていくか、教えていくかが本当に大切であると思ひます。真実の姿、まことの心を正しく伝えていけるようにまずは学ぶこと、本を読むこと、文化に触れることから始めていきたいと思ひます。

縁あつて参加し非常によく考えさせられることの多かつたこの合宿で関わつた多くの方々へ感謝いたします。
和の国のまことの姿知りゆけば日本に生きる誇り感じぬ

感謝の気持ちでいっぱいです

(福岡県中小企業経営者協会連合会 堀田 亘 34歳)

今年の四月から福岡中経協に着任してから折にふれ日本の歴史について学んできましたがまだまだ知らないことがあり



全体感想自由発表。登壇した参加者は「学問には実感や感動を伴って分るといふことが初めて分った」「昭和天皇の終戦時の御製に触れて涙がこぼれた」「短歌創作を通じて、自分の感情を表現することの難しさが分かった」「ここで得た良き友との縁を大切に、これからもつながらながら勉強していきたい」と率直に胸の裡を語った。

ました。この度、初めて合宿教室に参加させて頂き今まで教
わらなかつた、また知らなかつた日本の歴史の事実をほんの
一部分ですが教わることができました。

同じ班の方々には知識不足な私の意見、質問に対し真剣に
考え丁寧に解説していただき感謝の気持ちでいっぱいです。

今後はさらに正しい日本の歴史を学んでいきたいと思ひます。

大阿蘇に集ひ語りしみ友らと正しき歴史さらに学ばむ

日本のあるべき姿、日本人のあるべき姿は何なのか

(株はせがわ 永迫信哉 37歳)

今回、参加させて頂き、日常生活ではほとんど考えること
のない事が勉強できたこと、班別研修により老若問わずそれ
ぞれの意見や考えが聞けたことは今後の自分の人生にとって
大きな財産となつた。特に、たつた一回の敗戦で占領政策や
弱体化政策により、日本の神話や歴史が伝承されなかつたり
変えられたりしているということが印象的だつた。自分の仕
事も伝統文化を伝えていく仕事なので将来への危機感を抱い
た。日本のあるべき姿、日本人のあるべき姿は何なのか、もつ
と考へていく必要性を感じた。

和歌は「まこと」を原理とする。「まこと」とは、言うこ
と書くことを行うことが一致することであることから、先人の
言葉から学ぶべき事が沢山あると感じた。天皇について何の
関心もなかつたが、天皇は国の象徴と憲法に定められている

所以が理解できた気がした。

現在の日本、特に若年層の世代にとって生活面も考え方や
精神面も欧米化になりつつありこれを元に戻すことは並大抵
の事ではないが我欲だけでなくおかげさまの気持ちを持つて
もらえるよう使命感を持つて伝えていく必要があると感じた。

班友と語りていけば伝統を伝へる使命更に深まる

今回の合宿を機にさらに精進していきたい

(福岡教育連盟 矢ヶ部大輔 44歳)

今回初めて合宿教室に参加させて頂きました。まず講
義を受けた後、班別研修において意見交換、資料の輪読等
を行うことで内容を深めることができたという点です。特に班
構成がベテランの方から若い方にいたるまで様々な年齢層と
なつておりそれぞれの年代における問題意識を共有すること
ができたことは私にとって貴重な経験となりました。講義内
容もすばらしくそれぞれの先生方の情熱と日本を正しい道へ
と導くために現代の日本人が学ぶべき事を焦点化していただ
いたことは大きな財産となりました。もちろんこの講義は
きっかけにすぎず自らが学びを続け確固たる日本人観をさら
に追求していかなければならないことは言うまでもありませ
ん。私は高等学校で教えておりますが次代を担う若者に責任
を持つものとして今回の合宿を機にさらに精進していきたい
と考へます。本当に有難うございました。

感動を子供達に伝える責務がある

(小迫公認会計士事務所 小迫義仁 63歳)

初めての参加でしたが私のこれからの人生の在り方を決定づける重要な合宿でした。特に竹田恒泰先生の、日本のすばらしさを熱く語られた講義が印象的でした。自分の国に誇りを持ってない日本人。このままでは日本は亡びてしまう。そんな私の日頃の不安に伝えていただいたと思います。短歌についても三十一文字に日本人としての心を感じました。これから短歌を積極的に詠みたいと思っています。

今回の合宿でいただいた私の感動を自分の子供達のみならず将来の日本を担う多くの子供達に伝える責務があると感じています。寺子屋の先生などの子供達に触れる機会を十分に活用したいと思っています。多くの感動をいただき有難うございました。

星空のもとに行ふ慰霊祭に感謝の念をみ霊にささげり

発見、気づきが数多くあった

(牧 美喜男 62歳)

今回の合宿は四年前の伊勢合宿に続き二回目の経験でした。四年間色々な勉強をして来たが発見、気づきが数多くあった。



地区別懇談でなごやかに語り合ふ参加者。

コンテツは素晴らしい物でありカリスマに頼る事なく地道な活動を続けている姿勢に敬意を表したい。問題は知名度が低い事であり主要幹部の高齢化である。信用ある各種団体との提携、頻繁なサブ部会の構築をして裾野を広げてほしい。大阪茨木市では十月より5、60人を集める10回に渡る勉強会を企画している。成果を報告したい。

好きな歌を喜び話す班友の眼輝まなこき声はづみたり
しきしまの道のしらべに涙流れ感応相称の世界にひたれり

幾度も涙が溢れてくることを禁ずることが出来ませんでした

(井原 稔 65歳)

昨年に引き続き参加させて頂きました。今回も実に多くの感動に出会ふことが出来ました。竹田恒泰先生のご講義では本格的な戦争なくしていはゆる国譲りによって国が成立したことが連綿と継続する世界最古の国家の基ひとなったこと、和の精神と君民一体の世界の素晴らしさを教へて頂きました。わが国においては現在質的な自壊作用が加速度的に進んでおりますが、かうした状況を克服するためにはまづもって国民が自国の文化や歴史、伝統に誇りと自信を回復することが肝要であると痛感させられました。また、小柳志乃夫先生のご講義では君民感応相称の精神世界に眼を開かせて頂き天皇様の御製を拝誦することを通じて大御心のありがたさを身に沁みて感じる事が出来ました。今林賢郁先生には節義廉恥の心

を知り平成の武士たれ、と叱咤激励されました。高校時代の同級生である奥富修一兄からは歌を学ぶことよって日本の国柄の一番大切なものに触れることができることを教はりました。本合宿を通じて幾度も涙が溢れてくることを禁ずることが出来ませんでした。それは国民を思ふ歴代天皇の御製であり、川出麻須美先生の「極まればまたよみがへる・・・」のお歌であり、小林國男先生が節を付けられた高瀬伸一さんの「荒れくるふ海のはたては・・・」のお歌などでありました。

奥富修一兄の御講義を拝聴して

いくとせを励み努めてきみは今しきしまの道を熱く語れり
われもまた心修めてしきしまの道を進み行きなむ

コダマリヤウ子といふ小学生の作文を読んで感動しました

(中島法律事務所 中島繁樹 64歳)

合宿全体をしっかりと把握した運営委員長の運営のご尽力に感謝します。

竹田恒泰先生の説得力のある講義に大いに感服しました。君民は一体であることの論証のご説明には他の追隨を許さないう素晴らしさがありました。

昭和天皇についての「鹿兒島湾上の聖なる夜景」の資料として当時の小学校一年生の作文を発掘し紹介された小柳志乃夫さんに感謝いたします。コダマリヤウ子といふ小学生の作文を読んで感動しました。

合宿の後、私は今度こそ万葉集の大伴家持の歌、山上憶良の歌を全部読みたいと思ひます。

先達のつくりし和歌の言の葉にわが国びとの道は知らるる

「まごころ」「すなほな情意」を思ひ起こさせて頂
いた

(羽後信用金庫石脇支店 須田清文 57歳)

班別研修では、一人一人が、求める強い心を持って、講義の内容をそれぞれの自分の仕事、家庭に思ひをいたし、今までの経験、知識と検証しながらの発言がなされた。

最後の奥富修一先生の、ご講義資料の中の、次の言葉が身に沁みた。「他人のまごころに共感するすなほな情意は、そのまま天皇の無私のお心に感応するのである。」

班別研修では、一人一人が自分自身の、「他人のまごころに共感するすなほな情意」を、磨いていったと思ふ。私自身、忘れてゐた「まごころ」「すなほな情意」を、思ひ起こさせていただいた。有難うございました。

よみがへり聞こえるかな師の君(夜久正雄先生)のまごころこ
もりし言葉のしらべよ

かりそめの事にはあらじあひ集ひ語り合ひたる合宿の日々
おのがつとめ日々はたしつししまの道ひたすらに歩み行きな
む

カメラ・レポート 21



閉会式。国歌斉唱の後、磯貝保博副理事長(右)は主催者を代表して「大学や職場に戻っても、折々ここで学んだこと感じたことを思ひ起して精進して欲しい」と述べた。次いで廣木寧合宿運営委員長(左)は、自身の学生生活を振り返り「仲間との学問が学生を成長させる。今後も学問を続けていくことが我々の責務である」と呼び掛けた。

日本の良さを改めて実感した合宿

(株まるぶん 嵐 隆将 28歳)

日本の美しさ、日本人の素晴らしさを改めて実感できた四日間でした。

いつか、北海道、東北での開催を願っております。
先人の言の葉聞きて我思ふ故郷帰りていかに伝へん

合宿の終わりがゴールではなくスタート

(株ハウインターナショナル 東 晃史 30歳)

今回、合宿に参加させて頂き、沢山のご縁を頂くことができました。生まれも育ちも違う班員と心を通わせ、意見を交わし合うという経験は、何ものにも変えがたいものとなりました。

ご講義の中では、竹田恒泰先生のお話が特に印象に残っております。「君民一体」の文化で、長い間国家として成立してきた日本は、本当に世界で一番誇れる国であると再認識しました。もつと日本人は自国の歴史や文化に自信を持つべきだと感じました。

今回、数多くの短歌、特に御製に触れることができ、日本

の古来からの素晴らしさ、美しさにも気づくことができました。しかし、この合宿で学び、経験ができ、「ああ良かったな」で終わってしまったのは、何の意味もないと思います。今日という日は、ゴールではなく、スタートだと思います。今から少しづつ、真の日本の国民となるべく精進する覚悟を決めました。

大阿蘇でめぐり会ひたる班員と別れの日には友となりけり

少しでもまともな人間に近づきたい

(シーメンス・ヒヤリング・インスツルメンツ(株) 小野俊光 34歳)

志高く生きるみなさんの生き様に触れ、少しでもまともな人間に近づけるのではないか。その期待から合宿に参加した。合宿教室では班別研修に多くの時間が割かれている。双方の意思伝達。講義とは違った緊張感と充実感。班員の豊富な知識、経験、物の見方、考え方、自らの生き方をつらぬいてきた力強さ。圧倒される場面が多くあった。この時点で期待の前半は達成された。問題は後半であるが、これには時間が足りなかったようだ。今まで三十数年生きてきた生き方が、数日間の研修で変わるはずがない。変わりたかったけど、変われなかった。

そんな私の心を見透かして先輩から読書会へお誘いいただいた。来年の合宿へは「少しでもまともな人間に近づ」いた状態で、友との再会を楽しみたい。

知らない事は恥ではない

(福岡県中小企業経営者協会連合会 岡崎秀宣 36歳)

私がこの研修に参加したのは、勤務先の中経協で行って来いと言われたことがきっかけであったが、結果として参加して良かったと非常に満足している。それは、自分が知らないことが多いということを知ったからである。西郷隆盛がどうして人々から愛され慕われていたかということ、歴代の天皇陛下が日本の国民の事を我が事のように思いながら歌を詠まれていること等、知らないことばかりであった。ただ、班別研修の中で松田隆班長から、知らないことは恥ではない、むしろ今後、どれだけ知識を吸収していくかが大事である、ということをご指導頂いた。今後、日常業務の忙しさの中で忘れてしまうのではなく、勉強を続けていきたい。

この合宿では、短歌創作にも取り組んだ。班のメンバーと相互批評をしながら、より良い作品に仕上げていく中で、自分の心の中で思っていることを言葉で表現することの難しさを感じた。また一方で、短歌を作る上でテクニクにこだわるのではなく、自分の感じたことを素直に表現するという事を学んだ。短歌創作は中経協でも月に一回取り組んでいるが、今後継続して取り組んでいきたいと思う。

阿蘇の野でやうやう作りし我が短歌も友らの力で生まれ変わり

カメラ・レポート 22



閉会式。学生代表挨拶では、九州工業大学修士二年小林達郎君(右)が「歴史観や文化教育の伝承に危機感を覚えた。日本の伝統を正しく学んでいきたい」と意気込みを語った。そして、最後に立命館大学一年藤新朋大君(左)が閉会を宣言して、合宿教室の幕は閉じた。

身にしみた班長の言葉

(福岡県中小企業経営者協会連合会 上島 格 44歳)

本合宿の参加は、自分の意志ではなかったが、非常に有意義、かつ良い経験をさせていただいた。

事前情報では一班七名前後と聞いていたが、十二名も班員がおり、圧倒されたが、結果的には様々な意見が聞けて良かった。また班長(松田隆先生)に、私には知識がないと申した際「知識はない方が妙な先入観がなくて良い。どんどん吸収して欲しい」との言葉を頂き、身にしみた。

この合宿の一番の印象は、短歌相互批評であり、私の下手な短歌をそれなりの短歌に仕上げようと、班友に真剣に考えて頂けたことが嬉しかった。この姿こそ、本来、日本人が持っている全員一丸となって同じ方向に進む、助け合う精神だと改めて感じた。

合宿教室にて

阿蘇の地に有志が集ひ語らへばいつの間にやら夜は更けにけり

求めていたものに遂に会った

(株)ライフプラザパートナーズ 河崎由紀夫 51歳)

求めていたものに遂に出会った。リーダーあるいは君子たらんとする凡夫は五十一にして、ますらをととしての心構えを学んだ。

日本人として何を根っ子とすべきか求め続けたが今回の合宿で古事記および敷島の道こそ先人が大切に受け継いだものだを知った。

天武天皇の命により千三百年前に編纂された古事記には国生みのエピソードを経て国譲りのストーリーが展開されている。そこでは戦いによる殲滅によらず、それぞれの神を尊重した話し合いによる併合が繰り返されている。神話と正史の連続性、和を尊重した国家統一が古事記の重要テーマであるが、敷島の道については明治天皇の御製、更には、山上憶良の「好去好來の歌」にその神髄を見る。夜久正雄先生曰く「敷島の道は今も日本文化の中核であり、日本人の心のバックボーンである」。これから熊本の上士と古事記を研究すると共に作歌に励みたい。

大阿蘇に集へる同志を励ますや雨と雷いかづちあめ天より降らん

皆で考えてゆきたい

(三菱商事(株) 佐藤嘉明 58歳)

良い経験になりました。日本がどうすれば元の精神を取り戻すことができるのか、皆で考えねばなりません。まずは憲法、教育でしようが、立派な母親を増やさねばなりません。子どもは母の姿を見て成長します。自分さえよければ、という母親では、まともに育つはずがありません。ちゃんとした家庭を営むには経済的基盤が不可欠です。努力すればそれな

りの生活ができるのでなければ活気ある社会になりません。皆で行動してゆきましょう。世界の情勢は次のパラダイムシフトを目前に控えていますので。

阿蘇を降り更に磨かん友垣と嵐に負けぬ大和魂

和歌を手掛かりに伝統文化の継承に役立ちたい

(日本大学文理学部教授 夜久竹男 64歳)

今年初めて合宿教室に参加しました。大変勉強になりました。

私の関わっている科学技術の世界では日常的に国同士が競争しています。現在、日本の科学技術が世界の中で進んだ位置にあるのは、日頃から科学技術者達が大変な苦勞をして成果を上げているからであります。そのような科学技術者の多くの人の心の中には愛国心があって、日本の発展に尽くそうと考えています。

しかしながら、多くの場合は素朴な愛国心しか話題に上がりません。素朴な愛国心は重要ではありますが、それだけでは不十分で、伝統文化に裏打ちされた愛国心が必要と思われる。この合宿教室参加により、和歌を手掛かりに考えを整えて、伝統文化の継承に役立ちたいと思いました。

阿蘇合宿教室を終へて

班友と四日に渡る討論に日の本のこと思ひととのふ

班長としての合宿

(折尾愛真短期大学 講師 松田 隆 56歳)

今回初めて班長の役割をおおせつかり、緊張した合宿でした。また、初めて教え子一名を連れて参加したので、今までとは全く異なり、多くの事に気をつかわなければならぬため、多少、重圧を感じた合宿となりました。

しかしながら、その事によっていくらかは自分自身が成長できたのではないかと感じております。

国民文化研究会第五十七回合宿に参加して

若人の学ぶ姿に我もなほ学ばなければならぬと思ふ

足りない「心」が見つかりました

(株)ハウインターナショナル 桑木康宏 35歳)

自分の中に天皇陛下との紐帯がないことを知り、それをつくるものが御製を学ぶことであり、和歌を詠むことであることが確信できた合宿でした。

ルソーが理想と考えたが、現実的ではないとあきらめた君民一体の社会形態が日本では実現している。それはなぜかと竹田恒泰先生に尋ねるも、先生がお答え下さった天皇陛下の愛、親子の関係などのお話は、頭ではわかっても、心に深く響くことがあります。頭でしか分からない自分のアンバランス感に光を頂いたのが小柳志乃夫先生のお話でした。

先生の御講義が「心」に響き、自分の中に足りないと思っていた「心」を見つけることができました。

班友に恵まれ、短歌相互批評もすぐく楽しく、これまで参加するのが億劫であった短歌の会にはじめて参加したいなあという気持ちが高まりました。この気持ちを大切にしたいと思います。

友どちと心合せて探しあふおのが心に沿へる言葉を

短歌に親しみ短歌づくりに励みたい

(小林 至 62歳)

今回の合宿教室では万世一系の天皇をいただく日本国のすばらしさについて、また竹田恒泰先生の御講義によって君民一体の国がらについて知ることができ、大変良かったと思います。

小柳志乃夫先生からは、日本の国がらを、君民感応相称の世界として御製・国民の短歌を通して講義いただき、より深く感じ知る事ができたと思います。

息子小林国平の講義では、福岡国文研会員の御指導により、なんとか務めを果たす事ができ、感謝すると共にお礼を申し上げます。

今後は、「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」の輪読会への参加継続と、短歌の勉強をしたいと思えます。秋には、皇居勤労奉仕活動に参加したいと思える自分になりました。

感謝しております。秋は楽しみになりました。また、父の短歌に触れる事ができ、ありがたく、私も短歌に親しみ短歌作りに励みたいと思っております。

閉会式にて

日の丸を仰ぎ友らと君が代を声高らかにうたふはうれし

第三十一班—国文研—

輪読に参加する時間を作りたい

(新東電算(株) 大森淳史 25歳)

今年は初めて社会人、国文研班として参加しました。合宿地に着くと、恩師や大学の後輩、一年ぶりに再会した友人から次々と温かい言葉と笑顔で出迎えられました。

学生時代の輪読会を通して合宿に参加し、多くの人と出会って繋がった縁を実感し、自分が大学時代に何をしてきたのかを思い出せたように感じます。

社会人一年目でまだまだ勉強の日々ですが、輪読会にも参加する時間を作り、心を磨いていきたいと思えます。

合宿地までのタクシー内にて

水害で路崩れさり人來すと話を聞きて哀しく感ず

「もうだめだ、もうだめだ」とふ人の背に励ましたくも言葉にならず

彼方よりせみの声してこの夏の合宿に來し心地するなり

どんなところでも心を燃やす者でありたい

(穴井木材工場 穴井俊輔 30歳)

昨年から、阿蘇の小国で製材所に勤務しています。それまで東京で働いていたこともあって、たくさんの人に囲まれた生活でした。今は山の中で木こりをすることもあり、人と誰にも会わない一日もあります。

しかし、どんなところでも心を燃やす者でありたいと願っています。今回の合宿で、和歌の大切さを学びました。自分の心に向き合い、先人方の心を偲ぶことが、山の中であつても、繋がることできると感じました。私も和歌を詠んでいきます。

国のため汝の心を燃やせよと迫り来るは阿蘇の空かな

「短歌」は心を磨くものである

(株)寺子屋モデル 横畑雄基 36歳)

合宿を通して私は、改めて「短歌といふものは心を磨くものである」と感じました。普段の生活の中で上司を始めとする他者に対し、知らず知らずのうちに失礼な行為を取っていることがあり指摘されます。我が国の文化伝統を学んでゐる

つもりでも、深く自分自身の体にしみこむ程にはなつてゐないのだと感じてゐました。

先人は素晴らしい歌を詠んで居られます。歌を詠むことで自分の心を磨き、自己の思ひを三十一文字に込めて来られました。このやうに先人が「短歌を詠む」事を自然と繰り返してこられたこと自体が文化であり、歌を詠むことが文化の伝承になつてゐたのだと改めて気づきました。先人の素晴らしい歌をもう少し味はひながら、更に多く触れていき、自分の心を磨くための手本にしつつ、私自身も文化伝承者の一人として自覚を持ちたいです。

言の葉を磨きつづけし先人の姿は国の文化を伝える

今後の学びに生かしたい

(熊本市児童相談所 濱口知久 39歳)

今度の合宿では、小柳志乃夫先生のご講義に大変感銘を受けました。

これまで常にかけていた日本人の中における皇室の特別な存在をなかなか言葉で表すことが出来ずにいました。今回のご講義で小柳先生が「感応相称」と表現された言葉により、何か見えてきたような気がしております。

今回は充分な時間を取ることが出来ませんでした。自分自身、今後の学びに行かして行ければと考えております。

小柳志乃夫先生のご講義を聞きて

国民の幸祈らるる天皇の思ひの伝はり目のうるみくる

父の姿を思ひ出した

(南国殖産棟) 京田清人 51歳)

奥富修一先生のご講義を拝聴する中で、川出麻須美の歌の紹介があった。読み上げられた四首の歌のうち、一首目の「窮まれば・・・」の歌と、四首目の「世にあるも・・・」の歌は自分の心に深く響いた。先生はこの歌を評されて、「底抜けに明るい歌であり、大きな包擁力を持つ歌であり、かつ人の心を救ふ歌」であると述べられたが、先生がご友人の未亡人に送られた追悼文へのご返事と併せて、六年前に死去した父の姿を思ひ出した。日頃より口数の少ない父であったが、亡くなる前に語った言葉の一言一言が思ひ出されて来た。不思議であり、強烈な体験をしたと思ふ。

奥富修一先生のご講義を聴きて

亡き父の言葉迫り来師の君の高らかに詠まるる歌のしらべに
万代に命はかよふとのたまひし大人の言葉の強き響きよ

悲憤慷慨ばかりしてゐても仕方なし

(福岡県立朝倉高等学校教諭 黒岩真一 56歳)

度重なる内憂外患に何ら手の打てぬ我が国政界の混乱に、悲憤慷慨の日々。一条の光を求めて久しぶりに合宿教室に参

加しました。

今林賢郁先生の古典講義で味識した西郷隆盛の精神の崇高さ。小柳志乃夫先生の熱唱で深く確認した天皇のご存在の尊さと、我が国柄の素晴らしさ。生活と人生の違いの再認識等、ハツとさせられる事があまたありました。悲憤慷慨ばかりしてゐても仕方なし。至高の精神を見つめながら、仕事に少しでも生かして行くべく頑張つて参ります。

次々と馴染みの顔に逢ふことに心ひろごりたのしきまつ
生活をしばし離れて大阿蘇で人生語るはたのしかりけり

宿舍の庭で

見上ぐれば懐し星座のひろごりて時経るほどにしるけくなりぬ

天皇と国民の麗しい姿を少しでも生徒に伝へたい

(福岡県立博多青松高等学校教諭 藤 寛明 57歳)

短い期間でしたが、ご講義を聴き、国文研班で班員同士が真率な言葉を交はせたことを有難く思ひます。

今林賢郁先生が冒頭に話された「日本人の質的劣化と自壊作用が近年急速に進んでいる」との現状認識と、それに対処するには、立派な生き方をした先人に範を求めることが大切であるといふことに、全く同感です。近年、政府の失政に心穏やかならぬこと頻りですが、一人一人が尊敬する人物をしっかりと胸に抱いて自己研鑽を積み、物事をしっかりと考へて判断していく以外にないやうに思はれます。

翌日の小柳志乃夫先生のご講義は、音楽を聴きながら美しい世界に誘はれる心地がして、感動の余韻が残りました。幕末の孝明天皇から今上陛下まで、天皇の国民を深く思はれるお気持ちとそれに応へる国民の気持ちを感応相照の世界として伝へられ、その姿の有難さと美しさに感動を新たにしました。紹介された、明治天皇と昭和天皇がご巡幸された時の様子を知ることが出来る本はぜひ読んでみたいと思ひます。教育の場に身を置く時間も残り少なくなつて来ましたが、機会を捉へて、天皇と国民の麗しい姿を少しでも生徒に伝へたいと思ひます。

みえざれど心ひとつに結ばるる君民のさま麗しきかな

学びの道を怠らず歩んでいきたい

(日本郵政大村支店 橋本公明 57歳)

班長の野間口俊行さん、おおらかな明るい方で、班を指導して頂きました。おおらかな明るさは、学びの道にあると直観致しました。

国文研班の皆さんが、企業人として日々忙しい中で、どう学んでゐるのか幾分でも知り得て、今後の学びの道を怠らず、ゆつくりと歩んでいきたいと思つてをります。

唱歌を歌ふ前に

眼閉ちかすかに聞こゆる虫の音に心傾け聞き入りてゆく

伝統文化継承の大切さ

(土木原 巖 67歳)

今回の合宿にて多くの事を学び、さらに心と気を鍛えることを教えていただき、感謝にたえません。

皇室を我々が奉仕により守護する。今年は古事記一三〇〇年。笠沙の御前に神武さんがこられ、東征へと。阿多氏族が先遣隊で、今の奈良県五條市に陣取り、太陽を背に。究極の地かしはらの地に都を築いた我が日向の先人に、改めて頭が下がる思いであります。

この頃から和歌も頻繁に創作されたことへの大感激を思い、この度の合宿に、改めて学ぶこと、伝統文化継承との思い、その大切さを学ばせていただきました。本当にありがとうございました。

母のけが心はしづみて合宿へ遅くなりつつあせりはつのる

君民一体の姿こそ我が国体の姿

(インフリッジ工業株式会社 今村宏明 71歳)

皇室のことや、天皇さまを戴く日本人がいかに幸せであるかを、若い人達にどのように話したらよいか戸惑いを感じていたのに、竹田恒泰先生のお話は楽しく感銘深く、よどみなく滔滔と語られた。

天皇は日本国の「祭り主」であり、祈りの存在である。天

皇は専制君主から戦後の新憲法で「象徴」になられたのではない。帝国憲法時代その遙か以前から、天皇はわが国の象徴だったのであつて、悠久の歴史を国民と共に歩んでこられた天皇だからこそ、日本を象徴することが出来る。日本の国民一体の姿こそ、百二十五代の今上陛下まで続いている国体の姿である。天皇は主権の一側面である権威を担われ、国民は主権の実質的側面である権力を持つという、国民の關係の上に主権が成立する日本の国体の構造は、他国に類を見ない仕組みであらう。

竹田先生に、誰もが知っている事象を例にしながら日本の歴史と皇室のありがたさについてお話し頂いたことで、子供達に、天皇陛下の事をどのように話して聞かせたらよいか、多くのヒントを頂いた気がする。

はるばると乗り継ぎ来たる阿蘇山に合宿の友のなつかしき顔
彼方まで雲海広がるこの朝にはるかに見ゆる外輪の山

大雨に削ぎ落とされし山肌をいくつも抱きて立つ阿蘇の山

「南洲翁遺訓」の講義に感激

(鹿児島県信用保証協会 野間口俊行 60歳)
今回の合宿教室で、今林賢郁先生の「南洲翁遺訓」が講義に入っているのに感激しました。

西郷隆盛は、誤解されている向きが案外多く、このような場で遺訓が講義されるといふことは維新史及び明治初期の歴

史を考える上で大変意義のあることと思えます。

明治天皇の次の御製を今回の合宿教室の私の決意とします。

いとまあらばふみわけて見よ千早ぶる神代ながらの敷島の道

小柳志乃夫先生の講義『鹿児島湾上の聖なる夜景』を聞きて

闇の中一帯はるかなともしびに独り拳手せらるる御姿尊し

合宿中に創作された「短歌詠草」

—しきしまのみち—



短歌創作について

この合宿教室では、例年、主催者を含めて参加者の全員が、短歌を作ることにしてをります。これは、この合宿教室の大きな研修課題の一つであり、今回も多くの短歌が創作されました。

短歌は、現代においては、人々の日常生活には馴染みの薄いものとなり、文学的趣味の一つとしてしか受け容れられなくなってしまうてをります。従って、この合宿教室に初めて参加する学生青年諸君にとって、短歌創作は大きな戸惑ひであり、かなりの負担でさへあるかに見受けられるのですが、合宿日程を追ふにつれ、自らの心の動きを言葉にすることのむづかしさ、まごころの籠った言葉の奥深い味はひを多少なりとも体験して行く中で、次第に、その意味が把握されて行つた様に思はれます。

そもそも日本人は、千数百年の昔から、「万葉集」に見られるやうに、あらゆる身分・職業の人々が、学問知識の深淺、老若男女の相違を越えて、五七五七七の定型の中に、折々の自己の思ひを素直にうたひ上げてきました。自己の内心を赤裸々に短歌の上に表現することは、同時に厳しい内省を伴ふものです。いはば短歌創作の過程で、厳しい心の鍛錬が行はれるのです。そこで私達の祖先は、短歌を詠むことを人生の修行の一つの手段と考へて「しきしまの道」と呼んできました。日本人は、短歌を詠み交はすことによつて、人間にとつて最も大切な心の働き、情意を厳しく鍛へ合つてきたのです。先祖の歌を学ぶことは、私達一人一人の心の中に先祖の姿を蘇らせる作業であり、自分が紛れもなく先祖とつながりをもつた日本人であることの発見であり、また自覚なのではないでせうか。現代の教育では、知識の集積や論理の整合に重きが置かれ、人間にとつて最も根源的な心の問題がなほざりにされてをります。本合宿では、かうした現代教育の束縛を自ら感知し、そこから一步でも抜け出さうとする営みが、この短歌創作とその後の参加者同士の相互批評によつて集中的になされてゆきます。心の奥底に眠つてゐるまごころを呼び覚まし、人のまごころに敏感に感じる、素朴にして溢れる人

間性を取り戻さうとする試みが、ささやかながらも実現されてゆくこの貴重な経験は、参加者全員にとって、忘れがたい印象として心の奥深く刻み込まれるに違ひありません。

合宿二日目の午後、国民文化研究会会員の小林国平氏（祐誠高等学校教諭）により短歌導入講義がなされ、短歌を作る上での基本的ルールが指導されました。その後夕刻までに各人が創作した第一回目の短歌が提出されました。慌ただしい日程の中で生み出された短歌ではありませんが、作者の集中された内心の働きはしばしばに表現されてをり、作歌上の巧拙を越えて、強く惹かれるものが籠ってをります。提出された短歌は、同時に国民文化研究会会員による選歌・印刷のための清書作業を通じて、翌日には歌稿となつて参加者全員に配布されました。この歌稿をもとに国民文化研究会会員の澤部壽孫氏（国民文化研究会副理事長）によつて、短歌全体批評がなされました。ユーモアを交へた御話の中にも一語一語に含まれる作者の心を全身をもつて偲ばれ、直されてゆく姿に、参加者は短歌批評のあり方を自然に感得したのでした。

その後、各班ごとに班員全員による相互批評が行はれ、各自の短歌の表現をより正確に添削し合ふことを通じお互ひに友達の心に触れ合ふことが出来、合宿生活において、寝食を共にし、胸中を披瀝し合つて来た友情の結び付きが、一段と確認されました。

短歌創作を通して展開された、まことに稀な精神生活の体験は、参加者ひとりひとりに、言ひ知れぬ喜びをもたらすことになりました。

ここに収録された歌の数々は、班員の心を集結して推敲・添削されたものです。その表現形式においては稚拙なところも見受けられますが、これらの短歌の中から瑞々しい貴重な魂の輝きをお読みとり下されば、と心から祈念する次第です。

短歌詠草（しきしまのみち） 合宿第一回目の創作作品

（班別相互批評をして添削された作品です。）
（尚、第二回目の作品は感想文の末尾に収録）

第一班

学びゆきたし

慶應義塾大学 院 二年 杠 泰介

和こそ我が国の基にあるなれと語り給へるみ言葉すがし
言ふなればすめらみことは親なりと説き給へるを肯ひて聴く

福岡大学 経 一年 高久保 良和
水害の傷跡残る山見れば自然の猛威に驚かさるる

阿蘇山のみ空は青く澄みわたり我の心もかくあれと思ふ

九州工業大学 院 二年 小林達郎

和の国を創り上げ来しもおやらの知恵といさをの尊さを思ふ

法政大学 法 一年 本多光雄
中岳登山下山の折

阿蘇山中岳火口より火山ガス警報発令
ゲホゲホと咳き込みつも「もう一枚」「あと一枚」と写真撮りけり

我が国を外つ国人は敬ひてあるを知らざり我が国人は
占領の足かせ今も残れるは悲しく悔やしく憤ろしも

立命館大学 法 四年 吉富孝明
阿蘇中岳の火口にて

朗詠を聞きて
「短歌導入講義」にて小林国平君の和歌

封印を今ぞ打ち解き人皆と歴史と神話を学ばざらめや

政の乱れし時に災ひは起こりしといふ怒ることくに

祖父君のしらべのままに歌ひます君の御声の心に沁みけり

第二班

阿蘇もまた御国の末を憂ふらむ硫黄の臭ひ常ならぬらし

大阪湾広域臨海環境整備センター 久米秀俊
廣木寧運営委員長の開会式での御挨拶を
お聴きして

皇學館大学 文 四年 吉田裕史

三十年ぶりに来し合宿をわが心活かす「機」にせむと切に思へり

草千里散策にて

大阿蘇に登りて

友らと歩む

熊本市役所 折田豊生

福岡大学 経 四年 大山憲哉

竹田恒泰先生の御講義をお聴きして

二回目の合宿教室の参加にあたりて

快き思ひ抱きて若き師の説き給へるを聴きま

大阿蘇の青き御空に立つ雲の笑ひて我に語ることがとし

阿蘇の風体を感じて友みなど日本のこころを

つるなり

大阪大学 経 三年 岩井中 健

立ちのぼる阿蘇の噴煙ふはふはとその静けさに不気味さ覚ゆ

東京大学 理 四年 高木 悠
阿蘇登山

いざ火口を見んとする時悔しくも退避を命ずるサイレン鳴れり

鼻をつく硫黄のにはひは強まれり火口へ近づきゆけばゆくほど

噴煙の合間ゆ見ゆる翠色みどりの水をたたふる湖うみ美しき

明治大学 法 四年 岡部訓亮
山肌に豪雨の爪跡残れども小さき芽ぶきに心うたれぬ

むき出しの阿蘇の地肌に芽の見えて東日本の復興祈る

九州工業大学 情報工 四年 脇 勇貴
班別研修の折に

御教へゆ思ふところは数あれど言葉にするは難しきかな

緑地の遠く連なる山々に黒き爪跡凶々しきかな

暑まなか汗ふき登りし坂道を降りよとせかす風と雷鳴は

一橋大学 院 一年 中村紘右
阿蘇中岳に登りて

夏雲と雄々しき自然に抱かれて私の小ささ改めて知る

東洋紡績(株) 庭本秀一郎
阿蘇中岳火口にて

火山ガスの臭ひまさりて人々のせき込む様の眼に入りきぬ

私もまた息の苦しくなりぬれば早くその場を離れむとしき

気がつけば姿見えざる班の友ありて辺りを見廻したりき

混雑の中友の影見出して心andraぎ手を振りたりき

福岡県立直方高等学校教諭 小野吉宣
開会式の折に

歴史ふる合宿教室始まりぬ脇君凛と立ちて宣せば

渾々と清水湧き出づる日の本の歴史への旅へ君誘ひいざなき(廣木寧運堂委員長)

山中で道踏み迷はばあせらずに出発点にもどり給へと(理事長)

拓殖大学日本文化研究所客員教授 山内健生
火口より下る道すがら

たちまちに流るる霧の近づきて歩むわれらの視界を妨ぐ
なほも霧の流れ来たりて下りゆくわれらを襲

ひて包み込むなり
吾をつつむ霧の冷たくひんやりと頬に覚ゆる心地よきかな

第三班

細田学園高等学校 二年 嶋田裕一

大分の久住連山の被災地を見て
崩れたる崖を見る度胸痛む被災地の身に思ひ馳すれば

長崎大学 教 一年 富本伊織

草千里にて
初に食む馬串なれど班友と共に食ふれば美味しと思ふ

歩きゆく馬もいづれは馬串になると思へば悲しかりけり

追手門学院大学 社会 一年 絹田 暁
阿蘇山に登りて

阿蘇山の火口付近でガスを吸ひ喘息起こり苦しかりけり

福岡大学 人文 二年 岩永 啓

阿蘇中岳中腹にて
眼前に開けし阿蘇の国原の景色美しく歓声を上ぐ

立命館大学 文 一年 藤新朋大

阿蘇登山にて

バスに乗り火口を目指す道すがら水害の跡に
心痛みぬ

ゴンドラに数多の人と詰め込まれ我等が足の
踏み場もあらず

わづかの間火口を見るやたちまちに「避難せ
よ」とのアナウンスあり

名残惜しき阿蘇の火口を後にして山を下りむ
と歩き出したり

中岳の下りの道を友どちと霧に包まれ語りつ
つ行く

早稲田大学 商 一年 小柳誠志郎
大阿蘇の景色良けれど火口には噴煙のぼる山
怒るがに

中央大学 文 三年 廣木摩理勢
一昨年の我とは違ふ今の我をよく見給へと阿
蘇山に言ふ

大阪大学 経 三年 青野 遼
阿蘇の火口で

得も言へぬコバルト色のカルデラ湖できるこ
とならもぐつてみたし

(株)MCエバテック 天本和馬
竹田恒泰先生の御講義を拝聴して

我が国は争ひあれど二千年平和のうちに暮ら
し越してふ

連綿と一つに続く日の本は世界の信を得しと
のたまふ

日の本の信を世界に刻みたる先人の努め我は
忘れじ

(株)IHJエアロスペース 内海勝彦
竹田恒泰先生のご講義をお聴きして

皇室の外から皇室守らむと宣ふ言葉尊しと
聴く

日の本の有難きゆゑをひたぶるに師は説き給
ふ休む間もなく

若きらに思ひのたけを伝へむとされし真心伝
はりてきぬ

九州大学名誉教授 清水昭比古
阿蘇の朝

山の辺の雲はさながら海に似て大観峰を鳥か
とぞ見る

をみなごの肌にも似る草山を抉れる雨のいか
にいみじき

第四班

熊本大学 法 一年 石田 惇
阿蘇の旅で

バスの中語らひはずみ知らぬ間に親友を得し
心地するなり

九州産業大学 経 二年 緒方雄樹
山肌を削りとられし阿蘇山の未曾有の豪雨の
恐しき知る

専修大学 法 三年 奈良崎恵祐
阿蘇山にて

逸早く火口見たしと山道を友らと共に駆け足
で登る

間近まで登り来たれど突然に白き噴煙我らを
阻む

吹き出づるガスに行く手を阻まれて火口見ぬ
まま洩々下山す

福岡大学 商 二年 田上 亮
有毒のガスに阻まれ期待せし火口は見えず悔
やしかりけり

いつかまた来てみたきかなエメラルド色美し
き火口の湖よ

九州工業大学 情報工 三年 堀川祥平
国想ふ若き友らと語り合ひ我も学びの道に励
まん

福岡大学 経 三年 西脇悠平
雲海にいざ踏み出さんこの一歩先は見えずも
大志抱きて

國學院大學 院 一年 相澤守
阿蘇山

山肌のところどころに緑消え豪雨の爪跡痛ま

第五班

しきかな
痛ましき山肌見ゆれど聳え立つ雄々しき姿今
も変はらず

日本青年協議会 松岡篤志

緑なす阿蘇の山肌えぐられて豪雨のつめあと
痛みつつ見る

中岳の火口に近づくをりからに噴煙ふきあげ
雷とどろく

竹島を尖閣諸島を夷らのをかすを天は怒りま
すらむ

日章工業(株)代表取締役 藤新成信

時ならぬ雨の降りだし見上ぐれば阿蘇の五岳
は雲に隠るる

降りしきる雨も上がりて大阿蘇の青田の上に
秋風渡る

若築建設(株) 池松伸典

中岳登山

鼻をつく硫黄の匂ひのたちこめて火口近くに
たどり来にけり

有毒のガス流るれば離れよと知らする声に後
戻りせり

友皆と火口を眺め写し絵を撮りたく思へど口
惜しきかな

長崎国際大学 兼 一年 川田亮介

阿蘇山を登りて

阿蘇山の火口の景色眺むるも煙おほへば帰り
路につく

明星大学 情報 二年 岡松 優
中岳下山の折に

雷鳴と濃霧の中を足早に友らとともに黙して
急ぐ

折尾愛真短期大学 経 二年 古賀良希
中岳の下山の折に

突然の霧につつまれ前を行く友らの姿見えか
くれせり

西南学院大学 人間科学 四年 川原優一

竹田恒泰先生の御講義をお聴きして
皇室のまことの歩みを知りし時大和の誇りを
我は抱きぬ

福岡大学 経 四年 山下和成

九畳の部屋にて友と語りあひ話深まり暑さ忘
るる

福岡大学 工 四年 廣木文屋
大いなる烏帽子の山を前にして己が心も広が
る如し

東北大学 文 博士前期 一年 安江哲志
阿蘇山火口に

近付けばすこし煙せまり来て吾らを包み底
へ誘ふ

誘ひの底はゆだまり濁り湧き湯気立つ中に
深緑見ゆ

(株)ハウインターナショナル 谷口耕平
中岳を上るバスの車中にて

中岳をとりまく道を友どちと歓談しつつ上り
ゆきけり

中岳下山の折
晴れ間失せずさま雲の迫り来てあたりは白
くつつまれにけり

宮崎県立都城商業高等学校校長 竹下鉄郎
早朝宿の窓より雲海をみて

緑なす外輪山を満たすごとと白雲眼下に広が
りてあり

日本ユニシス(株)北海道支店 大町憲朗
阿蘇登山にて

白雲の湧き出す火口に真青なる湯だまり見え
きて美しきかな

阿蘇の神我らを迎へ雷をともなふ大雨降らせ
たまへり

第十一班

アメリカンスタイルジパン高等学校 一年 スクライチオティ茉莉菜

朝の集ひにて

朝露に濡れてきらめく草はらを歩めば心清々
しきかな

早稲田大学 政経 一年 岡田あかり

山の端に今沈みゆく夕日影窓にうつりぬ絵画
のごとく

東京大学 文三 一年 山口実花

阿蘇山にて

点々と黒き山肌露れて豪雨の烈しさ目にもし
るけき

宮尾八幡宮・宇部市役所 河本上枝

竹田恒泰先生のご講義を聞いて

古へゆ君と民とがいつになり築きし国を誇
りに思ふ

熊本市立湖東中学校教諭 山方富美子

暑さ中登りゆく道班友と語らふ声で心弾むも

阿蘇火口登山

汗かきつ火口近くに來つれどもガスの噴き出
で近づけざりし

火口には辿り着けずも友達と共に登りしこと
のうれしき

興銀リース(株) 小柳志乃夫

合宿の道統継がんと我が友はこの一年を力尽
しき(廣木寧兄)

日本史の中を旅せしと合宿の学問経験を友は
語りつ(開会式挨拶)

合宿に講義たまひしなつかしき師の君あまた
逝きたまひけり

窓の外を見やればはるか外輪の稜線しるし日
は傾きて

昭和音楽大学名誉教授 國武忠彦

青く澄むみ空を仰ぎ友どちと中岳めざし登る
は樂し

中岳の火口間近に來たれどもガスの噴き出で
見れぬ悔しき

第十二班

スクイラチオティのり子

阿蘇火口登山

陽も霧もいかづちもあり雨もあり我を迎ふる
大阿蘇の道

小迫知津子

阿蘇に來て三十余年前に我が母と訪れしこと
思ひ出さるる

気まぐれな山の天気におびえつつ足早に去る

大阿蘇の山

華泉書道会 坂本和代

竹田恒泰先生の講義を拝聴して
内にある大和魂めざめしかよろこびあふれ一
夜寝れぬ

草千里過ぎゆく夏を見送れば草原わたり秋風
のふく

難波江 紀子

先人のけふまで伝へし皇國われいかにして
繋ぎてゆかん

高知市立旭中学校教諭 岡つぐみ
竹田恒泰先生のお話を聴きて

和の国に生まれし喜び我が胸に沸きあがりく
るみことはきけは

和の国は愛の国ともいはれたる師のみことは
の胸にひびきぬ

火口登山にて

災害の爪痕残す往生岳麓の道の痛々しきかな
火口へと向かふ坂道雷の音に驚き息もあがり
ぬ

草千里見渡す限り広々と見ゆる景色の清々し
きかな

交通安全事故総合分析センター 小田村初男

阿蘇合宿に向ふ途中立野付近にてバスの
車窓より見て

山肌を荒々しくも削りたる豪雨の爪痕幾筋も見ゆ

集落到近き爪痕ありければ人の心地は如何なりしか

元 小田原市立矢作小学校校長 岩越豊雄
さはやかに山天晴れて山なみの阿蘇に噴煙のほり立つ見ゆ

くつきりと聳え立ちたる中岳に夏雲のごとき噴煙のぼる

たちまちに雲湧きいでいつの間にか阿蘇の山なみかくれて見えず

いつの間にか雲はれゆきてくつきりと阿蘇の山なみ姿を現す

第二十一班

東京工業大学 院 二年 安藤和則

雄大にそびゆる阿蘇の山肌をはぎとりし雨は恐ろしきかな

明解に最古の国と教へられ頼もしき声に目が覚まさるる

(株)ハウインターナショナル 兎洞裕一
いつもなら見上ぐるだけの雲にさへ初めて触れし阿蘇の山頂

阿蘇山の火口に立ちてガスを吸ひ喉痛むまで

咳きこみにけり

安藤奏一朗

阿蘇山の雄々しき姿目の前に我の想像遙かに超ゆる

宙吊りのレールをみれば鉄道のはやき復旧切に願へり

照り返す日差しに耐へて黙々と手振り足踏み火口を目指す

火口まで間近に迫る折にしも雷雨とガスに阻まれくやし

(株)はせがわ 坂本博志

静寂に流るる君が代胸をうちかすんで見ゆる日の本の旗

阿蘇の地ではじめて知りしよき日本いかに子どもへ伝へゆかむか

良き日本無言の教へ子どもらに背中を見せて伝へゆきたし

福岡大学経済学部教授 阿比留正弘

小林国平先生の短歌創作導入講義を聞き
て

わかりやすき君の講義に心うたれ短歌を身近に感ずる今日は

写真うらなはけしきを撮れど感動を記すは歌と君は言ふなり

火口見し直後に避難し我がバスに戻るやたち

まち大雨の振る

(株)九州建設弘済会 佐竹芳郎

草千里にて

喜々として乗馬を楽しむ幼な子を見守る親の顔も輝く

(有)米屋 安河内 順一

阿蘇登山出発遅れ後を追う仲間の姿はるかかなたに

あせる身に足どり重くおひつけずできるものならここで待たし

荒れる息有毒ガスに助けられ予定変更早目の下山

福島義栄

草千里去年の友との再会に話はずみて時刻を忘れり

苦しみてつひに登れり阿蘇の山友らの声に励まされつつ

阿蘇登山有毒ガスがいで来たり我等を拒み下山強ひたり

SIS (株) 内田巖彦

つづら折り汗を拭きつつ若きらと登るは楽しい見えて

美しき阿蘇の山肌ここかしこ豪雨削りし爪跡しるけし

下り坂景色や良しと思ひしがたちまち雲の覆

ひ隠せり

友達と草千里背に写りけり忘れ難かる写真と
ならむ

二年前ともに学びし友どちと再び会へばうれ
しかりけり

ともどちと汗をにじませ登りゆく阿蘇山の上
白き雲湧く

夕立は運よく止みてあざやかに緑ゆたかな草
千里みゆ

歌つづる友ら黙してかなたよりひぐらしの声
かすかに聞ゆ

(二回目の作品)

緑なす阿蘇草原に友達と御霊祭りの御竹立て
けり

友皆と御霊祭りの準備する阿蘇草原にすずし
風ふく

元 富山県立富山工業高等学校教諭 岸本 弘
竹田恒泰先生の御講義

年若き講師の言葉よどみなく国正さむと語り
ゆきますす

受け継ぎしこの日の本に良きものを加へてあ
とに伝へゆかむと

小林国平君講義

祖父の歌レジメに記し壇上に進みゆく君の姿

見つむる

いつの日か孫が己の詠みし歌語ると祖父は思
ひまさむや

ありし日の祖父の歌声なつかしみ唱ひゆく君
と思へば泣かゆ

(二回目の作品)

今別れし安藤兄弟と
心に残る兄弟なりき手を握り札を交して別れ
し君ら

昨夜の慰霊祭の思ひ起されて
亡き人も集へぬ人もみなここにいますかに思
ふみ祭りの庭に

第二十二班

日商保険コンサルティング(株) 惣島 基
心地良き緑の風を背に受けてさあ行かんかな
阿蘇噴火口

福岡県中小企業経営者協会連合会 堀田 巨
やうやくに阿蘇の火口に着きをれどガスいや
増してきた道戻る

(株)はせがわ 永迫信哉
緑映ゆる山肌の中をちこちに大雨振りし爪痕
の見ゆ

常ならばうるさく思ふ虫の音も阿蘇草原に涼

しく聞こゆ

福岡教育連盟 矢ヶ部大輔
班別研修

老若の種々の意見に聞き入りて我四十代の使
命を思ふ

竹田恒泰先生講義

和の国に生まれ出でたる喜びと教ふべきこと
心に刻めり

小迫公認会計士事務所 小迫義仁
火口まで息をはづませたどりで着きそよ風吹き
て疲れ忘るる

雨あがり遠くにかすむ町見えて牛らは遊ぶ阿
蘇の草原

羽後信用金庫 須田清文

小林国平先生ご講義の折に
幼な児の声きこえきておどろきぬ短歌導入講
義のさなかに

講師待つ子をいだきたる母をれり講義終はり
て外に出づれば
講堂のこどもの声はおとうさんがんばれとい
ふはげましなりしか

牧 美喜男
一人では心細しと思ひつつ霧満つるなか急ぎ
下りぬ

にはか雨晴れたる後に中岳の稜線の上に白雲

昇る

中島法律事務所 中島繁樹

中岳をおほひし霧は今晴れて峰のかなたに夏雲の立つ

君民は一体なりとあざやかに証かしたるかな
若き講師は

伊原 稔

大雨の渦の傷跡痛ましく山肌めくれ赤土見ゆる

緑濃き阿蘇の山なみ横に見て友と迎れば心たのしも

車窓より阿蘇の外輪眺むれば夕暮れ迫りて山の端うるはし

第二十三班

(株)まるぶん 嵐 隆将

のんびりと火口目指して登りしがガスが吹き出で急ぎ下れり

(株)ハウインターナショナル 東 晃史
雄大な自然のやうに強くあれと生まれくる息子に願ひを込めり

シームス・ヒヤリング・インストゥルメンツ(株) 小野俊光

我らいま君が代うたひ日の本のみ旗掲ぐればいとすがすがし

福岡県中小企業経営者協会連合会 岡崎秀宣

大雨の爪痕残る山肌に自然の力を思ひ知らさる

福岡県中小企業経営者協会連合会 上島 格

阿蘇散策にて
黒雲に雷雨の気配感じつつ火口を見んと歩を早めけり

(株)ライフプラザパートナーズ 河崎由紀夫
をちこちに黒土見ゆる草原に楚々と咲きけるカハラナデシコ

三菱商事(株) 佐藤嘉明

阿蘇車中にて
あちこちで牛馬優先の標識の目に入り来て我驚きぬ

日本大学文理学部教授 夜久竹夫

父知る人の言葉を聞きて
父の来し阿蘇の集ひに來し我を気づかふ御友らの言の葉嬉し

折尾愛真短期大学 講師 松田 隆

阿蘇の草千里にて
班友と馬をながむる教へ子の姿を見つけ安堵するなり

(株)ハウインターナショナル 桑木康宏

阿蘇登山にて
山下の背後に雲のせまり来て冷たき風の通り

すぎゆく

(学)熊本壺溪塾学園 白濱 裕

小林國男先生を偲びて(短歌創作導入講義)

師の君の面輪偲ばゆ明々と歌詠みあぐる君を仰げば
師の君のたびし便りに力得て教への庭に立ちし日思はゆ

小林 至

息子国平の短歌創作導入講義を聴きて
初めての講義に向ひ壇上にあがる姿ははつらつとせり

友どちに支へられたる国平を今亡き父も喜びますらむ

第三十一班

十年ぶりの合宿 穴井木材工場 穴井俊輔

「穴井君」と呼ばれし方を振り向けばなつかしき顔に嬉しさこみあぐ

(株)寺子屋モデル 横畑雄基

阿蘇登山
せまりくる硫黄のほひ強まりて登りゆくほど息も苦しき

阿蘇登山

せまりくる硫黄のほひ強まりて登りゆくほど息も苦しき

あとわづか登れば見えし火口なれど勧告出でて退避させらる

福岡県立朝倉高等学校教諭 黒岩真一
合宿地向ふ車の中ゆ

寝仏の御顔と間違ふ根子岳に今二筋の稲妻天降り

福岡県立博多青松高等学校教諭 藤 寛明
阿蘇山に登る

山路を共に登りつつくさぐさのこと語らふは
楽しかりけり

日本郵便大村支店 橋本公明
緊急避難のマイク放送を聞きて

頂上に着けば避難の声ありて来たりし道を急
ぎ下りぬ

雷の音も間近かに聞こえきてさらに足取り早
くなりゆく

鳥栖市役所 西山八郎
阿蘇火口登山

火口めざし登りてゆけば退避指示出されて直
ちに下山始めぬ

雷の音鳴りひゞき黒き雲低くたれこめ早やも
流れ来

足早やに山降りゆけど雷鳴のとく迫り来て心
せかる、

鹿児島県信用保証協会 野間口俊行

開会式を前に

雷雨やみ外を見遣れば目交ひに長閑に草食む
馬たちぞ見ゆ

国民文化研究会

理事長 上村和男

中岳に登る

坂道を友と語りひ中岳に近づきゆけば昔しの
ばゆ

中岳はいつに変わらず白煙を噴きあげにつ、
を、しくも見ゆ

副理事長 (株)伊勢利代表取締役 今林賢郁
なつかしき友らもまじりて登り路を語ひゆけ

ば心楽しき
いただきに近づくと折りも退避とふマイクは伝
へく何事ならむ

ガス濃度危険の域に及ぶてふ無念なれども下
山はじめぬ

にはかにもみ空くもりて雷の音も聞えて小雨
ふりきぬ

副理事長 磯貝保博

青空をかき消す雲のたちまちに広がりゆきて
山かげ見えず

窓辺には汗ひく風も吹き寄せて庭一面に雨の

しき降る

八月十七日・朝

副理事長 澤部壽孫

大阿蘇の朝の空は澄みわたり緑豊かなる山
美しき

をちこちに黒き地肌の目にしるく大洪水の禍
すさまじき

午後小林国平先生のご講義を聞き小林國
男先生を偲ぶ

在りましし大人のみ姿なつかしく目に浮び来
る「夕顔の歌」

阿蘇登山

火口見るひまも与へず避難せよとの無情なる
放送うらめしく聞く

我がバスに戻る途中に凄まじき神鳴りの音身
近に聞きぬ

西東北ゆ南ゆ心知る友らと会へば楽しかりけ
り
(二回目の作品)

八月十八日、慰霊祭(野間口行正兄のご
命日)

友逝きて十余り八年経たる今日奇しくも迎ふ
慰霊祭の日を

大阿蘇の齋庭づくりを共にせし過ぎし彼の日
を我れ忘れぬや

み空には星輝きて大阿蘇のみまつりの庭鎮も
りて立つ

師の君や先輩らとともに友も今天降りますら
む風のさやげば

みたまたちみそなはすらむ各々が力を尽くす
この営みを

たちまちには時は過ぎゆきまたまたち神のみ国
に帰りますらむ

八月十九日、合宿最終日朝

つかの間に最終日となり大阿蘇の朝の空は
さはやかなりき

この夏も共に生くべき新たな友を得にけり
奇しき縁えんに

共に立つ友を求めてひたすらに努めむと思ふ
厚木に向けて

みたまたち見守り給へくだちゆくみ国の行く
末我らが行く手を

全体意見発表を聞きて

壇上に若さら述ぶる言の葉に心はこもり力あ
りけり

若さらの思ひ聞きつつ拙くも合宿教室続けむ
と思ふ

榊寺子屋モデル代表取締役 山口秀範

夏空に映ゆる白雲湧き上り肥後国原を覆はむ
とする

その雲の彼方に突然稲妻の走りてやがて雷鳴
轟とどろく

雲低く垂れ込め見る間に大粒の雨滴落ち来ぬ
音も激しく

今頃は頂上目指し登るらむ友らの上し気遣は
るるも

大阿蘇の荒ぶる神には術なくも頂上晴るるを
なほ祈るなり

(二回目の作品)

行き違ひありて中途で合宿を去りたる友の気
にかかるなり

ひたぶるに熱き心を傾くる君ゆゑ生ぜし摩擦
なるらむ

君よしばし憩ひ給へよやがて時の泡立つ胸を
和ますべければ

秋風の立つ頃君を誘ひてみ国の行手を酌み
つつ語らむ

元 東急建設(株)常務取締役 奥富修一

朝のつどひにて
大阿蘇に朝霧は満ち学び舎ゆ見ゆる雲海もた
ちまち消えぬ

中岳火口にて避難指示ありロープウェイ
にて下山す

火口より上る噴煙山肌を縫ふがごとくにせま
りくるかな

避難後、駐車場にて

山裾に雷光ありてたちまちに雨は降りくるし
ぶきをあげて

草千里

不安げに母を見上げつ馬に乗り草千里ゆく
母娘ははなともしも

元 新潟工科大学教授 大岡 弘

竹田恒泰先生の御講義をお聴きして
国籍の得やすきゆゑに外国の人らみ国に押し
寄せくるらむ

人の和をこころざしもて国内ひろく作りゆか
るる御姿ををしも

(二回目の作品)

ひもろぎのみ前に立ちてまつりぶみ告げたて
まつる今のうつつに

榊石村萬盛堂代表取締役 石村僣悟
小林国平先生の講義を聴きて

切々と真直ぐに迫る言の葉に大人のいのちの
よみがへるごと

在りし日の大人の友等の交りの深き思ひに胸
を打たれぬ

山口県立熊毛南高等学校教諭 寶邊矢太郎
(二回目の作品)

創作短歌全体批評をききて
たんたんせしくちぶりもなかなかにあじは

ひぶかくこころしみきぬ

あなふしぎひとふしさはれば歌と立つそのう

たごころともしかりけり

夜久先生うつに胸に迫りしかみ声つまりて

うつむきたまふ

記録班

北九州市立医療センター 森田仁士

阿蘇中岳火口登山

久びさに会ひし友らと語りつつ歩めば坂も苦
にならざりき

噴火口近づくほどに喉をさす硫黄の臭気強ま

りてくる

展望所は目の前なるに警報の発令されて無念
引き返す

(二回目の作品)

廣木寧運営委員長に

一年をこの開催にうちこみし君の姿に頭さが
りぬ

勧誘の力足らざりし我なればせめて裏方にと
阿蘇に集ひし

段上ゆ若きに語る君の声はともに学ばむとの
力あふれし

アルバイト

熊本高校二年 鳥越椋子

阿蘇の山下るあひだに雲の中吹き去る風に足
を震はす

熊本高校二年 清田小春

あつさうだあそさん行つてあそばむと思ふも
ガスで下山しにけり

熊本高校二年 若山裕梨

牛追ひて阿蘇の草原かくはしくみどりの深さ
に落陽を見る

熊本高校二年 高倉久恵

山はだに黒く残せしあの跡は千里におとづる
変化の時か

運営本部

合宿運営委員長(栞寺子屋モデル) 廣木 寧

阿蘇に車で向かふをり立野駅近くの外輪
山の一角に山くづれの跡をみて

いただきゆ大筆はきたるごとくして山くづれ
しるく車窓よりみゆ

大雨に見舞はれたりし大阿蘇の外輪山の山肌
あらはに

(二回目の作品)

小柳志乃夫くんの講義「皇室と国民―感
応相称の世界―」を聞きて

御代御代のすめらぎの御製引きまして民思ひ
給へる御心説き行く

すめらぎの御幸にあひてかしこまる民の歌々
読みて行くかな

一年の思案の末の思ふまま若きに向けて国柄
語るも

福岡労働局 古川広治

澤部善孫副理事長はじめ諸先輩方が印刷
作業をされる姿をみて

さまざまの仕事ですすんでやりたまふ先輩方
の御姿ありがたく思ふ

(二回目の作品)

発表のリハーサル(山口秀範・廣木寧・
與島誠央先輩に来ていただく)

幾度も時間をさきて先輩らは集ひ給ひぬ我ら
のために

熊本県立第二高等学校教諭 今村武人

宮地駅にて合宿参加者を案内するをり
雷の鳴り響く音聞きながら無事の到着案じつ
待つ

レクリエーションにて
水害の傷あと深く緑なる山はだ削られ土あら
はれてあり

雨雲の急に立ち込め参加者はバスに向ひて急ぎて帰る

大雨の中かさをさし帰りこぬ参加者を待てども姿は見えず

(二回目の作品)

慰霊祭の準備時は雨との一報を聞きて

本日の天気は夕方雨といふ予報に心おだやかならず

夕方の天気は如何にと友どちの尋ねくれども我は分らず

ありがたしあまたの友の集ひ来て祭の準備を共に行ふは

草原に斎庭をさだめて友どちと力合せて祭壇つくる

雨予報つひにはづれてこの年の祭り行ふ敵かにして

指揮班

指揮班長(アサヒ飲料株)

澤部和道

阿蘇山の火口ゆガスの噴き出し今来し道を帰るは悔し

(二回目の作品)

先輩どちの助けのありて指揮班のつとめを無事に終へて嬉しき

熊本県立熊本高等学校教諭 久保田 真
我が国の眞の姿は昔より君民一体にありと喝破し給ふ

(二回目の作品)

運営につとむる若きはつらつと動ける姿のたのもしく見ゆ

祐誠高等学校教諭 小林国平
短歌創作の様子を見て

夕近き各班室は音もなく歌と向き合ふ姿ありけり

歌詠めりと喜び語る若きらの声聞き我もうれしくなりぬ

事務局

合宿受付始まりて

(株)ラック 高橋俊太郎

受付の準備を終へて待つだけと思ふ矢先に電話鳴りけり

名札が足りぬとの報を受け訳も分からず駆けつけにけり

「大丈夫」と周りの問ひに答へども心あせりて汗の止まらず

(二回目の作品)

先行きの不安に思ふ世なれども学びをもとに地道に進まん

山本伸治

火口まで今一步なりと言ふときに退避案内の出るは悔しも

(二回目の作品)

集ひせし皆の心根結ばれて流れ来たりぬ発表の場に

医務班

国立病院機構 都城病院院長 小柳左門

阿蘇の朝

日ぐらしの声もさやかに鳴きいでて阿蘇国原に朝は明けゆく

まぢかなる声に合はせて遠くより鳴き交はずかな日ぐらしの声

起きいでて望めば遠き山の端に今さし出づる朝の光は

緑こき大観峰を望むかな阿蘇国原の雲海のはて

小林国平君の短歌導入講義を聞く

祖父様はいかに喜びたまふらむ孫の語れる歌の講義を

祖父様の詠みたまひたる夕顔の歌を示して語る君かな

はつらつと明るき声に語りゆく君の講義を聞
けば楽しも

我が父と兄弟のごとく親しかりし祖父様逝き
て十年余は経つ

祖父様の命受けつぎ歌の道君は伝へゆく心を
こめて

(二回目の作品)

涙流しおのが体験語りゆく学生の言葉に心う
たるる

合宿地に寄せられし歌

八月十六日 下関市 寶邊正久

若き友ら継ぎて営む合宿を思ふばかりぞ阿蘇
茅原に

左翼争乱根に残りつつ興國の芽吹きも遅し年
来経ゆくに

阿蘇の野の空に聞こゆるみおやのことば聞き
たまへかし新しき友よ

青森市 長内俊平

西東ゆ集ひ来ませるみ友らのあひみる姿目に
みる如し

東京都 坂東一男

真夏日に大阿蘇の地に学びをる若者達に皇國
託さん

日の本の固有の鳥々波たかし熊(ロシア)に
狼(中共)狐(韓国)も狙ふ

無念なり透析治療の身となりて大合宿に参加
叶はず

あとがき

初冬の候、皆様にはその後如何お過しでせうか。熊本市「国立阿蘇青年交流の家」で共に学び、語り合った「合宿教室」から早三ヶ月が過ぎました。この度やうやくこの「感想文集」を皆様のお手元にお届け出来る運びとなりました。この「感想文集」は、「合宿教室」の最後に走り書きしていただいた感想文と短歌を編集したものです。

編集作業は、まづ、それぞれの班の班長又は班付の方々に、感想文と第二回目の創作短歌を添削・編集していただくことから始めました。

皆さんお一人お一人のお心こもる文章・短歌を丹念に読み返し、編集することは、神経、時間の掛かる作業ではありますが、お一人お一人のみづみづしい心の動きをお偲びできる心楽しく嬉しい時間でした。

本感想文集編集方針は以下の通りです。

一 「感想文」について

執筆者のお心のうちが最もよく表れてゐる箇所を摘要し、表題も付けました。逆に文意

の不明瞭なところは、執筆者のお気持ちを辿りながら、原文のニュアンスが損はれないやう加筆しました。なほ、「かなづかひ」については、原文を尊重し、漢字および文法上の誤りについては訂正してをります。

二 「短歌」について

合宿では二回にわたって短歌を作りました。第一回目のは班別相互批評にて添削され、全参加者それぞれ一首以上をもれなく巻末の「短歌詠草」に収めました。また、感想文の執筆の折に作っていただいた第二回目の短歌は、それぞれの感想文の末尾に入れました。こちらの表記は全員歴史的かなづかひに統一し、文法上の誤り等は感想文と同様に訂正いたしました。

この「感想文集」作成のためには、班長および班付の方々以外にも多くのご協力を頂きました。お忙しい生業の傍らご協力いただきました高木雅史、濱崎史嘉、佐野宣志、の各氏に心より御礼申し上げます。

カメラ・レポートの写真はカメラマン松永和文さんにお世話になりました。

いろいろな方々のご協力によって出来上

がった「感想文集」を、ご精読下さいますやう切願いたします。

本文集を読み進むにつれて、「合宿教室」の様々な感動が鮮明に甦ってくる事と存じます。お読みの後は、是非とも班長、班付、班友、更には他班の方へも、一筆お便りを差し上げていただき、今後も互ひに励まし合ひ学んでゆくことができますことを願ってやみません。

(北濱 道記)

〔資料〕

第五十七回 “合宿教室（阿蘇）” 感想文集

非売品

平成二十四年十二月二十日発行

編集兼発行者

社団法人 国民文化研究会

理事長 上村和男

編集長 北濱道

東京都渋谷区東一―十三―一―四〇二号
〒一五〇―〇〇一―

電話 〇三―五四六八―六三三〇

FAX 〇三―五四六八―一四七〇

